

# ニュージーランド英語の成立と 民族意識の形成

～ エスノニミック・ディスコースの歴史的考察<sup>®</sup> ～

久屋孝夫

「…十九世紀以来、単なる方言の地位に置かれていた数々のことばが、国家のことば、すなわち言語になるために、自らの書きことばを所有するようになった。 […] 言語と呼ばれることば、一定の資格づけを受けたことばは、たいていが国家のことばになっている」  
[Tanaka (田中克彦) 1981: 21]

0. はじめに
1. 社会言語学における「国家と言語」の扱い  
～言語内変容と言語外要因の係わり～
2. ナショナリズムと言語
3. エスノニミック・ディスコース分析の必要性
4. NZの歴史解釈とナショナリズム
5. NZにおける NZ English 研究
6. エスノニミック・ディスコースの分析
7. NZのナショナリズム
8. 歴史的な文脈の中のエスノニム・ネットワーク

<sup>®</sup> 本論考は2005年4-9月のThe University of Aucklandでの在外研究(研究題目「オセアニア地域における英語の変容」)、2007年3月のNZでの資料収集、および2009年度国内研究(研究題目「ニュージーランド英語の成立と民族意識の形成に関する一考察」、研究内容「ニュージーランド英語研究の進展とニュージーランド人という概念の形成過程の関連」)に基づいて行なった研究の成果である。貴重な研究休暇を許可された関係の方々に深謝する。

- 8.1. 国家/社会名称としての用法
- 8.2. 民族/社会集団名称としての用法
- 8.3. 言語/文化/精神名称としての用法
9. エスノニム・ネットワーク：全体像の考察

10. おわりに

references

[Abstract]

0. はじめに

本論考の目的は、ニュージーランド英語の成立事情を、国家の形成過程における自我・自民族意識の覚醒および変容とつなげて論ずることである。特にエスノニム (ethnonyms) の出現が意味するものをより広い言語内外の文脈において捉え、歴史的検証を行なうことである。その文脈をエスノニミック・ディスコース<sup>1</sup>と称する。ここで分析の対象となるエスノニムは、近代国家成立の過程でしばしば争いの源となる「国家像」を象徴する「国家/社会名称」およびそれに関与するであろう語彙群(民族/社会集団名称、民族言語/文化/精神名称)を含む。エスノニムの表象する国家・社会・民族の集合的意識がどのように芽生え、成長し、維持・強化されていくのかを社会的文脈の中で観察する。また最終的に国家イメージを象徴するエスノニムの言語化が自民族意識の覚醒変容にどのように積極的な役割を果たすのかについて考察する。

以上の思索はある個人的エピソードに触発されて始められた。最初にその私的事情について述べておきたい。2005年5月、論者が在外研究期間をAucklandで過ごし始めた時期に、Waitemata Harbourを臨むNational Maritime MuseumでNZ英語に関するシンポジウムが開かれた。そのタイトルは "In Our own Words" であった。パネリストには長く辞書編纂に携わってきた Tony Deverson と Graeme Kennedy に加えてメディア分野から NZ

<sup>1</sup> エスノニムの生成、エスノスピーク (ethnospeak) の歴史的変容とその構造に関連して Kuya(久屋孝夫) (1990: 403-414), Kuya(1991: 522-41) で論じている。

英語に関する一般読者向け著書もあり、造詣も深い Max Cryer が司会として招かれた<sup>2</sup>。Deverson と Kennedy はその前年に *The New Zealand Oxford Dictionary* [以下 *NZOD* (2004)と省略]<sup>3</sup> を上梓したところで、Oxford University Press から出版されたばかりの辞書がシンポジウム会場に持ち込まれ山積みされていた<sup>4</sup>。このシンポジウムは、その名の通り「われらのことば」について「自らのことばで」語られ、過去一世紀半を超える英語の歴史をもつニュージーランド人の「英語民族」意識について再考ないし再認識させるできごととなったように思われた。また今後いっそうの自己覚醒を促すきっかけになるように思われた<sup>5</sup>。

## 1. 社会言語学における「国家と言語」の扱い

### ～言語内変容と言語外要因の係わり～

Tanaka (1981) の次の言説は国家と言語の密接な係わりを適切に述べている。

「隣接の優勢な言語とあまりにも近い、しばしば方言的な関係に立たされていることばを持つ民族は、自らが独立した固有の民族であることを客観的に示す

<sup>2</sup> 5月22日開催のシンポジウム内容は以下のように紹介されている：“In 1997, the late Harry Orsman published his life's work: *The Dictionary of New Zealand English*. Eight years later, we have a new comprehensive and encyclopedic dictionary of New Zealand English: *The New Zealand Oxford Dictionary*.” Editors Tony Deverson and Graeme Kennedy join Max Cryer for an entertaining and elucidating look at the lexicon.” (Wells & Johnson 2005: 39)

<sup>3</sup> この辞書の特徴については後で national identity に関連する語彙を考察する際に論ずる。

<sup>4</sup> この辞書は2005年の Montana New Zealand Book Award for Reference and Anthology ファイナリスト候補に選定され、その後入賞することになった。

<sup>5</sup> この年にはさらに3つの出版物が出現した。言語変容の底流、すなわち言語変化の外面史と言える政治・社会・文化史の領域から Smith (2005), Liu et al. (2005), Dench (2005) が上梓された。さらに数年遡れば、古典的歴史書としての Sinclair (1959) の改訂版が2000年に、また King (2003) も上梓されている。世紀の変わり目はNZの歴史回顧の重要なポイントとなった感がある。

ために、その方言に固有の言語名を与えることによって、固有の言語に仕立てあげようとするであろう。固有名詞は固有の言語を作る。[...] 言語学がいかにも「言語そのもの」に即した観点からの分類を主張して、国家の介入を無視したとしても、現実にはその無視は意味をもたないのである。..言語学とても、ある言語のことを述べるのに、その言語に冠せられた民族や国家の名を用いないでは、すなわち政治の概念に助けを求めないでは、ことばを指し示すことすらできないではないか。ドイツ語、フランス語と、その名をあげることじたいが政治に依存しているからである。」(Tanaka (田中克彦) 1981:160-61)

社会言語学的立場からは、言語(内)現象の変容に言語外の政治・社会・文化現象がどのような影響を与えたか、その変容の要因を外部的要因 (external/extralinguistic factors) と内部的要因 (internal/intralinguistic factors) に類型化し、それらの相互作用の結果として分析することが有効である。その手法の一例は Samuels (1972) の見解に見ることができる。

'A name is coined for a new invention (e.g. *typewriter*, *ballpoint*). The origin is extralinguistic, but the coinage is made from intrasystematic sources. If the invention is then introduced to a neighbouring community under the same name an extralinguistic factor (introduction of the invention) is still present, but the introduction of its name constitutes an extrasystemic but intralinguistic influence on the receiving system.' (Samuels 1972:7) [下線は筆者、以後引用部の下線はすべて筆者に拠る]

彼は14世紀ロンドン方言が当時の社会の変化に沿うかたちで変容していったことを証明しようと試みた。もともと Essex 系の言語的特徴がロンドン方言の核となっていたところに、Kent, Surrey, Middlesex にも共通する語形が合流し、14世紀前中期には East Anglia の語形も添えられ、さらに末期には Central Midland の要素が支配的になるという変容 (e.g. *-inde* から *ande*, *ynge* への変化) は、種々の記録から推定される隣接地域からのロンドンへの

人口流入の増大と対応していることを突き止めた<sup>6</sup>。

Samuel の採った立場を基本としつつ、ここではもっと踏み込んで言語変容の要因としての nationalism と national identity という視点を新たに加えて考察を進めていく。その立場は Cameron (1990) や La Page (1997)<sup>7</sup> と近くなる。

It is also relevant ...that mainstream linguists are skeptical of the sociolinguists' claim to share their glory. Sociolinguistics is in some respects a 'poor relation'... Sociolinguists therefore find themselves in a position where they have to prove the validity of what they do to their own academic colleagues in the mainstream; this again encourages them to be as 'rigorous' and 'objective' as possible...and, more importantly, to let

<sup>6</sup> The historical evidence bears out this hypothesis in a remarkable way. Firstly, the original connection with Essex is confirmed by the early diocesan boundaries. Secondly, in Domesday book, Norfolk and North Suffolk are the most densely populated areas, and are known from names in taxation-lists to have provided most of the migrants to London in the earlier ME period. But thirdly, in the mid-fourteenth century there was a change in proportion: the populations of Leicestershire, Northamptonshire, and Bedfordshire had increased, and the immigrations to London from the latter two counties now equaled those from East Anglia. The dating of this last change in particular agrees well with the corresponding but abrupt change in the surviving texts from the late fourteenth century.

Such a correlation of linguistic and historical evidence provides the only possible solution for sequences of abrupt replacements that are evidently non-functional in origin: the changes from *-inde* to *-ande* and then to *-ynge*, or from *schulde* to *s(c)holde* and then back to *s(c)hulde* were doubtless complex at the level of register or of contact between immigrant and indigenous groups, but the chronology shows that the immediate cause of their presence in London was extralinguistic.' (Samuels 1972:169)

<sup>7</sup> Cf. Le Page (1997:31) は Cameron (1990) を部分引用してこう述べる: 'Cameron has harsh things to say about the "naive" and "crude" models of society that quantitative sociolinguistics uses; in the way in which "the primacy of linguistic over social issues if vigorously asserted" and in which the quest for "scientific status" has been part of the eschewing of sociological theory and acceptance of a vague claim that "language mirrors society." We need..a theory linking the "linguistic" to the "socio"; without it we are "stranded in an explanatory void."

linguistics set the agenda for research. (Cameron 1990:84)

And this is the task I would set for a demythologized sociolinguistics: to examine the linguistic practices in which members of a culture regularly participate or to whose effects they are exposed. [...] We might also discover how language change may come about through the efforts of individuals and groups to produce new resources and new social relations. For language is not an organism or a passive reflection, but a social institution, deeply implicated in culture, in society, in political relations at every level. What sociolinguistics needs is a concept of language in which this point is placed at the centre rather than on the margin. (Cameron 1990: 93-94)

ここで、統計と計量的なデータ処理を重要視する研究、科学的と称して社会学理論や「社会の鏡/鑑としての言語」観をただ素朴に受け入れる研究を批判し、社会現象と言語現象をつなぐ社会言語学の理論化を説いている。

現実に実在するのは個別民族語の多様な文化の型、文脈の下に展開され、相互依存することばの万華の姿であり、社会と断絶した個人の自律的で同質的で不変的かつ普遍的な脳内認知作用の鋳型ではない。そのような「自律」体系が没歴史的ないし非歴史的性を獲得することにより成り立つ内面史だとすれば、言語の多様なありようを透視するのは、歴史的に深く依拠した動的な言語研究である。言語の外面史と密接に関わり、響き合って起こる変容の時空軸を無視して言語の多様性の意味と構造を語ることはできない。社会言語学はこの領域にかかわる新しい学問の一分野であるはずだが、この観点からの先行研究は必ずしも多くない<sup>8</sup>。その理由は、20世紀前半までの歴史的研究の反動として、言語を担う人々の属する社会集団から独立したことばの研究こそが「科学的」言

<sup>8</sup> By the same token, it is essential to stress that there is nothing inherently progressive about sociolinguistics. North American sociolinguistic research, like North American social science in general, tends toward descriptive and statistical statements that rarely go beyond correlating some linguistic feature with some social factor. (Newmeyer 1986:147f.)

語研究観とする思想が出現し、結果的に、非歴史性や共時性を出発点とする20世紀言語観の核心である自律性原理の縛りが通時的研究にも影響を及ぼし、外面史とのつながりで言語変化を論じることに消極的否定的になってしまったと思われるからである。しかし一方で地球上に広範囲に拡散していく特定の大言語や、他方で絶滅し、あるいは、絶滅しかかっている言語の動態を目撃するにつけ、言語の変化、その結果として現に生じている現代の「多様性」を、時代ごと、地域ごとの政治、社会、文化、民族意識のありようと向き合わせ、「言語の成立」の外面史、政治的側面を言語変容の要因として捉え直そうとする視点が再び必要とされている。なぜなら言語の興亡や変化を、それを担う人々の言語意識のありよう、人々の政治的社会的文化的文脈を無視して扱うことはできないからである。

そのような流れに沿う形で、Bailey (1991) は「英語」という政治・経済的覇者の言語に関わる言語意識の「文化的」側面に敢えて挑戦的に光を当てようとした。「文化」はすぐれて社会政治現象であり、Bailey はそれらを包括する婉曲語または上位概念語として「文化」なる用語を使っている。英語がどのように言語外要因との絡みによってその姿を変えたかということについて15世紀にわたる民族の歴史における英語の政治学を意図したと考えることができる。本論考もその立場を堅持し、かつ nationalism あるいは national identity という概念をキーとして、言語変容と言語変容に関与する言語外現象を追跡するものである。

さて Bailey (1990) は nationality という用語を政治と言語の領域に二分して nationalism という現象を説明しようとしている。

'Political nationality is one cultural force to be reckoned with; linguistic nationality is another and often separate one (and it includes the cohesiveness of discourse communities built around salient varieties of what philologists would regard as "one language").' Bailey (1990:84)

その意図するところを言い換えれば、「政治的民族意識は考慮に値するひと

つの文化的圧力であるが、言語的民族意識はそれとは異なる、しばしば別個の圧力である。(前者とちがって後者は言語学者文献学者がひとつの同じ言語だと見なす言語の微妙な多様性を巡って(それぞれに)構築される談話集団がどのように互いに凝集的かという問題を含む)」となろう。ここでの force は圧力と解釈してよいだろう。Identity は集団に働く構造的な作用、圧力と考えるのが適切だろう。こうして Bailey (1990) は以下のような変化過程を辿る言語の変容を通常の発展モデルと捉えることになる。

'Most of our histories of English presume a "normal" evolution. Language spreads from the center to the periphery; the periphery develops independent "standards" that first compete and then coexist with those of the homeland, and these new standards may in their turn become new centers of radiating influence.' (Bailey 1990:85)

Bailey は言語的独立宣言が現実の言語的分化に先だって起こることが多く、英語に関して言えば、政治的独立を宣言する人々は彼らの属する集団が全体としてそれと気付かないうちに「新英語」の独立を宣言することが多いと指摘する点は重要である。

'Declarations of linguistic independence often precede actual linguistic differentiation. As far as English is concerned, people who declare their political independence often proclaim a "New English" before the larger community has discerned one.' (Bailey 1990:85)

さらに、出現が多様性の価値を重要視する社会言語学が、世界の諸地域に見られる多様な英語の形態 (World Englishes, New Englishes) を浮き彫りにし、均質的ではない「言語の実相」解明に向けて20世紀後半に新たな発展を遂げるにつれて、NZ英語の研究記述はこれまでになく刺激と影響を与えられ深化していった。1950年代のアメリカでは、Uriel Weinreich (1953) が多様

な民族の接触という現実と向き合い、言語接触 (Languages in Contact) という概念から言語変容を扱った。英国では Alan S.C. Ross が社会階層による言語の違い ('U/non-U') について発表 (1954)、次いで教育社会学の視点から Basil Bernstein は 'elaborated/restricted codes' を考え出した。'diglossia' で社会言語学の領域を拡げた Charles A. Ferguson、1960年代には 'ethnography of communication' と 'sociolinguistic competence' で知られる Dell Hymes と John Gumperz、都市化社会 (New York) の言語多様性を 'social variables' に基づいたフィールドワークによって検証した William Labov、1970年代には 'sociology of language' の Joshua Fishman、カナダ英語の特徴を明らかにした J. K. Chambers、接触による英語変容に新たな概念 (accommodation, leveling, new dialect formation など) を導入し英国内だけでなく世界に広がる英語の多様性に適用しようとした Peter Trudgill など、本格的な社会言語学の研究が展開されていくのに呼応して、新たな関心が NZ 英語へと向けられるようになるのに時間はさほどかからなかった<sup>9</sup>。

社会言語学の知見は 20 世紀後半に現れたもうひとつの思想であり、諸言語間の価値の平等、地域間変種の対等的価値を民主的に評価、尊重するという大前提に立ち、諸言語間の対等な関係と個別言語のかけがえのなさを自覚させ、誇りをもたせることにつながった。これは国家の対外的地位の向上やセルフプライドの高揚という言語外的条件とは別に、出現した新たなアカデミックな地平であり、このサポートによって、アメリカ英語、イギリス英語の歴史的生成過程とは異なる流れで、NZ 英語が姿を表してきていると考えられる。

## 2. ナショナリズムと言語

ここで nationalism のめざすものについて、政治学の立場から Anthony Smith (1991:99,143) の発言を引用して論考の出発点としたい。

<sup>9</sup> 'The rise in interest in New Zealand English within New Zealand from the mid-1960s ..was followed by renewed interest in New Zealand English abroad. World Englishes were attracting more attention..., and it is in that context that accounts of New Zealand English appeared in overseas publications.' (Gordon et al. 2004:19)

'As a doctrine of culture and a symbolic language and consciousness, nationalism's primary concern is to create a world of collective cultural identities or cultural nations. While it does not determine which units of population are eligible to become nations, nor why they do so, nationalism plays a large part in determining when and where nations will be formed. It is at this point that nationalism enters the political arena.' (99)

Smith はここで集合的文化アイデンティティ (複数) からなる世界の創造を目的とするナショナリズムの概念自体が政治に影響を受け、あるいは政治的に決定されることを指摘している。

'Of all the collective identities in which human beings share today, national identity is..the most fundamental and inclusive. Not only nationalism, the ideological movement, penetrated every corner of the globe; the world is divided, first and foremost, into 'nation-states' – states claiming to be nations – and national identity everywhere underpins the recurrent drive for popular sovereignty and democracy, as well as the exclusive tyranny that it sometimes breeds. Other types of collective identity – class, gender, race, religion – may overlap or combine with national identity but they rarely succeed in undermining its hold...' (143)

また集合的アイデンティティのうちでもっとも基礎的で包括的で強固に見えるのが民族的、国家的アイデンティティであると述べる。そこで nationalism という概念の英語における歴史を辿っておくことにしたい。

OED によれば nationalism に関連する語群の出現年代は次のようである。

nation a1300; national 1597;

nationalist 1715; nationalism 1844; nationalistic 1866; nationalistically 1913

nation が 14 世紀初頭に、national が 16 世紀末に生まれているが、中英語期には政治的よりは人種的な出自の色合いが強い。政治的な民族性という二次の意味は近代に芽生えることになる<sup>10</sup>。すなわち派生語である nationalist<sup>11</sup> が 18 世紀、nationalism<sup>12</sup> が 19 世紀中葉、nationalistic が 19 世紀後半<sup>13</sup> と、「民族主義」の概念群が近代後期に発生したことは、そのことを間接的に証明している。抽象概念が個別事象に先立って生じる可能性は低いはずであり、抽象的な「民族主義」概念化に先立って個別民族の民族主義概念化が存在すると考えられる。それゆえナショナリズムが促進し、時には突き動かす原動力となる、言語文化、あるいは言語意識そのもののダイナミズムに触れるために個々の社会や民族や民族言語の名称の起こりを歴史的に辿ってみる必要がある。

自らの意識の依って立つ基盤を形成する言語である母語、第一言語を母国語または自民族語として自覚するまでには、多くの場合、次の過程を経ると推測される。文語が庶民の口語から徐々に識別され、権力と結びついた口語が権威ある文語として、国家という精神の背骨、つまり政治社会文化の制度の礎・手段として機能し、広く公的記録や発言がなされ、「国家語」へと洗練されていく。その過程では書記法の統一が行なわれ、「国家語」としての文語が「文法」という形で論理性、規則性を備えた整然たる秩序体系として構築される。文語は威信と権力を担いつつ、次世代へ継承される遺産、栄光の重要な一部分として公教育の場でその価値が具体化され再生されていく。それと並行して民族の歴史や創造された概念や価値観の記録、民族の政治社会文化活動の集大成とし

<sup>10</sup> 'In early examples the racial idea is usually stronger than the political; in recent use the notion of political unity and independence is more prominent.' (*OED* s.v. **nation** I.1.a); Williams (1976/1983: s.v. **nationalist**) にも同様の指摘がある。

<sup>11</sup> 'One characterized by national tendencies or sympathies; an adherent or supporter of nationalism; an advocate of national rights, etc.' (*OED* s.v. **nationalist** 1.1)

<sup>12</sup> 'devotion to one's nation; national aspiration; a policy of national independence' (*OED* s.v. **nationalism** 2.)

<sup>13</sup> 1866 Visct. Strangford *Selection fr. Writ.* (1869) I. 98 She seeks to conciliate the nationalistic sympathies and projects of her South-Slavonic or Illyro-Servian populations. 1899 R. H. Charles *Eschatology* iii. 84 This popular conception was unethical and nationalistic. (*OED* s.v. **nationalistic**)

ての辞書の編纂が追随すると考えられる<sup>14</sup>。

### 3. エスノニミック・ディスコース分析の必要性

この過程で、民族意識に関わる語彙群（社会集団や個別民族や特定民族語の名称）が民族自称語あるいは他称語（ethnonyms）として浮上してくる。それは上記の政治社会文化集団的意識を、内的にあるいは外的に、強め維持するのに大いに貢献することになる。エスノニムの出現の文脈および時期と社会の変容の間に何らかのつながり、あるいは共起関係を見いだすことができるはずである。

Smith (1991:77) は national identity にかかわる諸概念が言語化されたディスコースのネットワークとして多様に具現化されると、以下のように述べる。

'These concepts – autonomy, identity, national genius, authenticity, unity and fraternity – form an interrelated language or discourse that has its expressive ceremonials and symbols'<sup>15</sup>. These symbols and ceremonies are so much part of the world we live in that we take them, for the most part, for granted. They include the obvious attributes of nations – flags, anthems, parades, coinage, capital cities, oaths, folk costumes, museums of folklore, war memorials, ceremonies of remembrance for the national dead, passports, frontiers – as well as more hidden aspects, such as national recreations, the countryside, popular heroes and heroines, fairy tales, forms of etiquette, styles of architecture, arts and crafts, modes of town planning, legal procedures, educational practices and military codes – all

<sup>14</sup> Cf. Tanaka (田中克彦) (1981:54-75)

<sup>15</sup> また別の箇所では Smith は nationalism の目指すものとの関連で象徴的言語についてこう触れている。'As a doctrine of culture and a symbolic language and consciousness, nationalism's primary concern is to create a world of collective cultural identities or cultural nations.' (Smith 1991:99)

those distinctive customs, mores, styles and ways of acting and feeling that are shared by the members of a community of historical culture.'

民族呼称は Smith の述べる nationalism の言語、シンボルの中核をなすものである。その出現は歴史や政治と密接に切り結んでいるはずである。

さてニュージーランド（以下 NZ と省略する）においてはどうかであろうか。英語が使われ始めて 15 世紀以上の歴史をもつイギリス、その 1/4 の約 4 世紀の時間しか経過しないアメリカ合衆国と比較しても、オーストラリアと同様、英語話者の歴史の極めて短い国でありながら、2 世紀に満たない歴史の中で急速に英語化していくという特異性を有している。これら三者の歴史のちがいと英語化の違いを大雑把ながら社会的歴史的な脈の中で比較分析してみたい。

#### 4. NZ の歴史解釈とナショナリズム

NZ の歴史叙述に現れる national identity の探求、民族意識の台頭については Keith Sinclair (1959/2000), Michael King (2003), Philipa Mein Smith (2005), Alison Dench, (2005), James Belich (2006), Donald Denoon et al. (2000), McGill (2004) などによって得られた知見のうち、nationalism に直接的あるいは間接的に関与すると思われるできごとを経年的に列挙する。(なお、以上の出典について年表中では煩雑さを避けるため、著者名とページだけを示し、出版年は標記しない。)

- 1250-1300:** evidence of first Polynesian settlement (Smith 256) (マオリの移住開始)
- 1642:** visit by Abel Tasman without landing (Smith 256)
- 1769-70:** first visit, of 6 months, by Lt. James Cook (Smith 256)
- 1840:** The Treaty of Waitangi: NZ joined the British Empire on February, as part of the colony of New South Wales. (Smith 49)  
(英国とマオリとの間の条約により英国が公式的に NZ を支配する端緒となる。)
- 19th c.** [Wars home] the NZ Wars...created the national debt. (Smith 70)  
(Northernland 1844-46; First Taranaki 1860-61; Waikato 1863-64; Second Taranaki 1865-69; 1868-72) (19 世紀条約締結直後の 40 年代から 70 年代の初頭は国内戦争の時代。先住民マオリと後住民パケハの争いが激しさを極める。)
- 1850s-60s:** Gold rushes around the Pacific Rim (Smith 79) [Colomandel 1852; Nelson 1857; Otago 1861; West Coast 1864] (Dench:76;80;83;91)  
(金鉱で一攫千金を夢見る海外からの移民増大)
- 1880s:** The crash came...when NZ experienced its long Depression. (Belich 37)
- 1891-1912:** Liberal governments...set out to create NZ as a democratic social laboratory (Smith 95) 'world's social laboratory'; (第一次世界大戦前 20 年間自由党政権は NZ を「社会の実験場」にしてさまざまな改革に着手)
- 1891:** John Balance, the Premier(-1893) & the founder of the Liberal Party – the country's first organized political party.  
(NZ 政党政治の始まり；バランス自由党の創設者首相となる。)
- 1893:** Richard.J.Seddon, 'King Dick', (Liberal) assumes office as 'Premier'(-1902) & as 'Prime Minister' (-1906)  
NZ became the first country to give women the vote (世界初の女性の参政権賦与)
- 1898:** NZ introduced old-age pensions (年金制度の導入など独自の政策を採り始める)
- 1906-12:** Joseph Ward(United; Liberal) assumes office (-1912 as 'Prime Minister')
- 1908:** population reached 1 million
- 1912:** William F. Massey (Reform) assumes office (-1925)
- 20th c.** [Wars overseas] (20 世紀は国外での戦争の時代；第一次、二次世界大戦への参戦は NZ が世界の一員であることを世界に知らしめ、自ら目覚めるきっかけになる。)
- 1915:** Gallipoli became the pivotal episode in national mythology by marking the beginning of the Anzac tradition (Smith 125) The 'export of brains' became one of NZ's chief contributions to the world. (Sinclair 208)  
(頭脳流出の時代；NZ 生れ Rutherford, Mansfield 英国に去る)
- 1921:** The first Anzac Day is marked. The full public holiday[25th April] has been introduced after lobbying by the Returned Soldiers' Association (Dench 2005:156)  
(第一次世界大戦ガリポリでの激戦から 6 年後、国民の休日を制定)
- 1930s:** & 40s was a formative ear in nation-building, through the conscious 'making' of N.Z. (Smith 150) (国家建設形成期；民族意識覚醒の動き)
- 1930-1949:** proved to be one [sc. an era] of cultural nationalism (Smith 172) 'cultural nationalists' (King 381) (文学に現れる民族主義；政府による文化政策支援)

- 1935:** Michael Savage (Labour) assumes office (-1940)  
created NZ's pioneering version of the welfare state, & also took some independent initiatives in foreign policy. (福祉国家政策の萌芽, 自立的外交政策を主導)
- 1940s:** [WWII] centennial publications were intended to strengthen the sense of nationhood among the Pakeha majority (Smith 172)  
(ワイトンギ条約 100 周年; 多数派パケハの国家観を鼓舞する出版物相次ぎ刊行)
- 1940:** Peter Fraser (Labour) assumes office (-1949)
- 1945:** the 'Dominion of N.Z.' became 'NZ' (Smith 172)  
(1907 年以来の名称 Dominion (自治領) を廃止)
- 1947:** NZ ratified Statute of Westminster & attained constitutional independence (Smith 172) (ウエストミンスター憲章批准により現代 NZ 成立)
- 1948:** British subjects became N.Z. citizens for the first time, with N.Z. passports. (Smith 172)
- 1949:** Sydney G. Holland (National) assumes office (-1957)
- 1950s:** are often recalled as a 'golden age' (Smith 176)
- 1951:** The draft ANZUS Agreement..signed at San Francisco (Dench 198)  
(英国介在なしの豪州=NZ=US 間安全保障条約締結)
- 1952:** population reached 2 million
- 1957:** Walter Nash (Labour) assumes office (-1960)
- 1960:** 'Kiwi' Keith Holyoake (National) assumes office (-1972) 'Call me Kiwi' (McGill 127)
- 1960s:** (& 70s) NZ had taken part in the process of decolonization:  
[1962 Western Samoa; 1965 Cook Islands; 1968 Nauru]  
(近隣島嶼国の脱植民地化推進)
- 1965:** NAFTA New Zealand-Australia Free Trade Association  
(豪州との経済的連携を強化)
- 1970s:** "Alliances are not as strong as they used to be in the 50s and 60s." [Brian Talboys] (Sinclair 319)  
Where should N.Z. turn if Uncle Sam were aloof and the Motherland [sc.U.K.] had deserted her family [sc. NZ] (英米との協力関係弱화의兆し) (Sinclair 319)
- 1972:** Norman Kirk (Labour) assumes office(-1974); declared that NZ would 'find & hold a firm moral basis for its foreign policy'...international idealism  
(外交政策で国際理想主義の展開) (Sinclair 321)
- 1973:** Britain joins EC; the greatest threat hanging over NZ's future  
(英国の EC 加盟により英国との関係の将来に暗雲たれ込める)  
Protest against French nuclear testing. (フランス核実験に抗議)  
Population reached 3 million. (1908: 1 million; 1952: 2 million)
- 1975:** Robert Muldoon (National) assumes office (-1984) as prime minister. (Dench 234)  
"For my part, I look back to Britain" [Muldoon] (Denoon et al. 2000:411)

- 1981:** Springbok rugby tour divides the nation. (Belich 38)  
(アパルトヘイト体制の南アフリカ白人ラグビーチーム遠征で国論が二分)
- 1984:** David Lange (Labour) assumes office(-1989)..adopted an antinuclear foreign policy, delighting the left, & a more-market economic policy, delighting the right. (Belich 39)  
'Rogernomics'..the economic liberalisation experiment; 'blitzkrieg'(Smith 208-9);  
'Big Shift' (Belich 39) (財務大臣ロジャー・ダグラスの急速で全面的な市場経済による自由化政策 [電撃攻撃, 大変革])  
anti-nuclear policy: "Hold your breath for just a moment, I can smell the uranium on it." [D.Langi] (McGill 144) (反核, 非核重視の独自外交政策を堅持)
- 1985:** 'There is no moral case for nuclear weapons...Rejecting nuclear weapons is to assert what is human over the evil nature of the weapon' [D. Langi] (Smith 219)  
refusal of visit by USS *Buchanan*<sup>16</sup>  
(米艦船ブキャナン号の寄港拒否, ANZUS からの離脱)  
French spies sank the antinuclear protest ship *Rainbow Warrior*<sup>17</sup> (Belich 39)  
(フランス諜報機関による「虹の戦士」号爆破事件に激しい抗議)  
Waitangi Tribunal power to hear treaty grievances since 1840 (Smith 262)  
(ワイトンギ条約違反に対する苦情を先住民族マオリから聴取する特別法廷を開廷)
- 1986:** end of 'white New Zealand' immigration policy
- 1987:** NZ legally declared nuclear free State Sector Act (Smith 263) (非核国宣言)
- 1990:** Jim Bolger (National) assumes office(-1997)
- 1992:** Government begins reparations for land confiscated in the Land Wars of 1844-72. (Belich 39) (先住民族マオリに対して 19 世紀土地戦争の賠償を開始)
- 1994:** peacekeeping troops in Bosnia (Smith 263)
- 1999:** peacekeeping troops to East Timor (Smith 263)  
Helen Clark's (first elected woman Prime Minister -2008) Labour government in coalition with Alliance and Green parties (Smith 263)

<sup>16</sup> この年に生まれた Kiwi disease--日本では「核アレルギー」に相当する句か--については以下を参照: *ONZD* (s.v. **Kiwi** 15.Special com.) **kiwi disease** obs. the institution of a 'nuclear-free' policy, esp. in respect of visits of US warships. **1985** *Dominion* (Wellington) 20 May 1 Mr Mack said the United States did not particularly care about New Zealand but was worried by the nuclear warships ban because it might result in a spread of 'the **Kiwi disease**' to other areas. **1990** *NZ Geographic* VII.33 'Spread "**Kiwi disease**" - nuclear-free seas' reads a protest banner hung from [Auckland Harbour] bridge by intrepid Greenpeace volunteers in 1987.

<sup>17</sup> In 2005, the 20th anniversary of the bombing was commemorated in Auckland (with a tribute concert taking place at St James' Theatre), Paris (with a gathering of 500 people), and at the site of the original *Rainbow Warrior* (joined above the depths by the new ship of the same name). (Bain 2006:184)

- 2004:** Maori Party formed (Smith 264), won 4 of the 7 electorates reserved for Maoris. (Brown 41)
- 2005:** increase of tourists from 36,000 (1960) to 2,000,000(2005) (Belich 39)  
(NZの国際的認知高まる、過去半世紀間に観光客 50 倍超の増大)
- 2008:** John Key (National) assumes office.

以上を纏めると以下のようなになるだろう。NZは1840年のワイタンギ条約により英国の正式な植民地領とされたことからマオリ人だけの単一民族社会の歴史は破壊され、新たな局面に入る<sup>18</sup>。イギリス系白人の急激な増加が英語人口の比重を増す<sup>19</sup>中、先住民マオリとの摩擦軋轢が圧迫・迫害から内戦にエスカレートすることも続き、その結果英語多数派支配を不動にするのが20世紀の初頭である<sup>20</sup>。第一次世界大戦への参戦<sup>21</sup>、ヨーロッパ戦線への派遣などに伴う欧州との接触により、世界の中に占めるべき地位と貢献という観点から民族意識は徐々に高まっていく。第二次世界大戦終了後、小国といえど、世界に誇るべき地位を築き、国際社会に貢献する、その心意気は大きくなりこそすれ、縮小することはなかった。30年代の文学思潮に見られたイギリスとの決別は政治的にはかなりおくれで起きた。特に70年代以降イギリスのEEC加盟、

<sup>18</sup> 人口変動の歴史的叙述は (Brown 2006:45) を参照: 'The Maori population was somewhere between 100,000 and 200,000 at the time of first European contact 200 years ago. Disease and warfare subsequently brought the population near to collapse, but a high birth rate now sees about 15% of New Zealanders identify as Maori, and that proportion is likely to grow. Maori is, along with English, an official language, and many Maoris believe the clear implication of the Treaty of Waitangi is one of a partnership with the Crown, representing the 80% of New Zealanders who are 'Pakeha', or of European heritage - forging a bicultural nation.'

<sup>19</sup> 2001 Census (quoted from Peddie 2003:10) によれば主要な民族別人口とその比率は以下のようである: Total population 3,737,280; NZ European 2,696,724(c72%); NZ Maori 526,281(c14%); Pacific Island People c248,000 (c6.6%); Asian People c243,000 (c6.5%)

<sup>20</sup> 本論考は、英語の成立を軸とする英語の変容とそれに関わるナショナリズムの問題に限定して行なった。NZのナショナリズムを扱う際に先住者マオリ民族との関係を除外することはできないし、それ自体扱うに足る研究対象である。マオリとパケハの間の民族対立問題に立ち入らないのは、それが固有の複雑な独立した大きなテーマを成しており、比較的最近再燃した On Tree Hill のモニュメントについての議論でもわかるように、民族間の深い亀裂、歴史的解釈の差異の存在があらためて浮き彫りにされ、和解への紆余曲折が予想されるからである。それに関する論考については次を参照: Lie, James H., Tim McCreanor, Tracy McIntosh & Teresia Teaiwa (2005)

<sup>21</sup> 'In the history of the Great War, the Gallipoli campaign made no large mark. The number of dead, although horrific, pales in comparison with the number that died in France and Belgium during the war. But for New Zealand, along with Australia and Turkey, the Gallipoli campaign played an important part in fostering a sense of national identity.'

[( <http://www.nzhistory.net.nz/war/the-gallipoli-campaign/introduction> )]

軍事大国アメリカによるヘゲモニー掌握への反発、南太平洋核実験推進国フランスとの対決がイギリス離れを加速し、非核政策を推進させ、この小国が独自路線を歩み始めるように政策転換していくという社会情勢の変化が読み取れる。'down under'に位置する NZ は、政治経済上の国際協調と国際競争の間で、また地理上は他と隔絶した国として独自性を保ちながら生きてきた。育まれた英語の独自性への刮目はその特異な歴史的条件にあると推定される。

## 5. NZ における NZ English 研究

前世紀半ば Arnold Wall は、NZ における英語の状況について 20 世紀前半を振り返り、こう述べている。

'The English language as spoken and written in New Zealand during the last fifty years show, in speech, a slow, gradual, but indubitable divergence from the home standard; in the written language, however, this tendency is far less remarkable, though there is a general trend towards laxity in grammatical forms, a lack of observance of certain traditional habits such as, e.g., the rules of punctuation and the use of inverted commas...' (Wall 1951:90)

徐々に英国離れする NZ 英語を認める Wall の論考のすぐ後で、19 世紀からその独自性を強める方向に動いている NZ 英語の傾向を具体的に指摘する Harold Orsman はこの後さらに半世紀近くを経て前世紀の終りに結実する NZ English のバイブルとなる辞書群を作成した人物である。

'1900 is not a specifically significant date in the history of colloquial New Zealand English. The main drift towards an independent idiom started much earlier. Social and political independence was almost worshipped in the colonies. The first settlers had to name the strange situations and

objects of a new environment. ...This drive towards independence of speech persists into the twentieth century.'

上記の出典は Partridge & Clark (1951) である。Creole や Pidgin English を視野に入れない点でその当時の学問的限界があるとはいえ、世界の主要な英語の形態をひととおり網羅した初めての書と言える。その後（英語爆発とも呼べる）地球規模の「英語化」現象が顕著になり、それに対する学問的知見が社会言語学と呼ぶ学問領域になっていく、その萌芽、嚆矢としての重要性をもつと言えよう。341 ページからなる全体は 2 部で構成され、イギリス英語に 202 ページ、アメリカ英語にその残り 139 ページが割かれる。イギリス英語は literary English, non-literary English, Dominions English, Dialect, Cockney, the teaching of English, general trends and particular influences と 7 つの章に分けられている。

さらに Dominions English として独立している章（全 38 ページ）では 8 ページの概説が前置され、NZ 英語に 6 ページ割く以外に、カナダ英語に 8 ページ、南アフリカ、オーストラリア英語について 5 ページ（Eric Partridge）、インド英語に 6 ページが割かれている。多少のちがいはあれ、余白を考慮すると量的にだいたい同程度の記述がある。

その後 50 年が経過するなか NZ 英語の特質の研究は着実に盛んになっていく。そのきっかけは、隣国豪州において 19 世紀の最後の 10 年の終わり 1896 年に完成し、その 2 年後シドニー大学から出版されている Edward E. Morris (1898): *A Dictionary of Austral English*. であつたにちがいない (cf. Turner 1966:25f.). 編者の説明によると Austral/Australasian という形容辞はオーストラリア、タスマニア、ニュージーランドを含む地域の総称であり、その守備範囲は広い<sup>22</sup>。Austral という形容詞が冠されていることから推察されるように、この中には Australianism だけでなく New Zealandism も多数含まれ

<sup>22</sup> ' "Austral" or "Australasian English" means all the new words and the new uses of old words that have been added to the English language by reasons of the fact that those who speak English have taken up their abode in Australia, Tasmania, and New Zealand.' [Morris 1898: xi]

ている<sup>23</sup>。Morris は 1843 年（東インド会社の支配する）インドに生まれた英国人であり、英国で教育を受け、メルボルンで研究職に就いた経歴を持つ。経歴的には外からオーストラリアを眺めつつ編纂事業を完成させた人物である。

ここで、NZ に関しては多くマオリ語に由来するものが多く取り上げられている（e.g. *Maori, pakeha, haka, kauri, pukeko*）。それはおそらくオーストラリア大陸における先住民 Aboriginal の風物文化伝承を包摂するという趣旨に照らし合わせて、辞書の大きな目的に合致するものであったと思われる。その端緒は *Oxford English Dictionary* の初代編集者 James Murray の意図により始められ、その記載内容を補強する意図でオーストラリア地域の英語の用例収集が開始されたのであった<sup>24</sup>。オーストラリア英語研究の活発化<sup>25</sup>の社会背景として当時のオーストラリアの人口変動<sup>26</sup>に伴う nationalism がそれを後押しした面もあるだろう。Morris はその趣旨に賛同し 1892 年学会の折に収集の意義を説き、投稿を呼びかけた。しかし諸般の事情で OED の出版が遅れたため、その資料を活用すべく単独で完成されたのがこの辞書であった。集められた用例は結果的に OED 本体に組み込まれなかったが、およそ 90 年後 Morris の意図は、より体系的網羅的な形で Ransom (1988) *Australian National Dictionary* に引き継がれ、OED とともにその影響力が Orsman の辞書編纂に及んだことは間違いない。

この通時的視点は、タスマン海を挟んだ対岸 NZ の Orsman に引き継がれ、

<sup>23</sup> *Austral adj.*の語義は狭義には Australian を指すが、広義には NZ を含むより広域な範囲を指す。その用法は 1875 年に遡ることができる（Orsman 1997: s.v. **austral**）。前者の狭義用法は 1823 年には現れている（Ransom: 1988 s.v. **Austral**）。

<sup>24</sup> 'The study of Australian English began as a by-product of the work done for the Oxford Dictionary. Edward Morris, one of the readers for that work, gathered the Australian material he had collected into an independent dictionary...' (Turner 1966: 25)

<sup>25</sup> 'The serious study of Australian English began at the end of last century [i.e. 19th c.] during a period of nationalistic sentiment in Australia...' (Turner 1966:25)

<sup>26</sup> 'By 1900 most Australians had been born in Australia. Percentages of inhabitants born in the United Kingdom are, 1861, 53.18 per cent...1901, 18.00 per cent.' (Turner 1966: 21) 1861-1901 の間の 40 年間に英国生まれの「一世」が 35% の減少を示し、2 割以下の少数派になっている。

20 世紀末に *The Dictionary of New Zealand English* として結実し、その業績の上に Deverson と Kennedy が共同で 21 世紀始めに結実させた業績は、その点において、英国の Johnson (1755) や米国の Webster (1828) がなした成果とはやや異なる意味において、それを超える輝かしい成果をもたらした点で、特筆すべきであろう。

NZ 地域英語研究のパイオニア Turner (1966) には、歴史的視点を踏まえた Australasia 全般にわたる総合的な叙述が見える。しかしその記述はあくまで Australia が中心で、NZ の歴史や nationalism の視点からの分析は不十分で、補足的に添えられている感が否めない。ただし 70 年代以降深化していく NZ 英語研究の嚆矢の役割を果たしたことを考慮すれば、その批判は当たらないかもしれない。70 年代から 80 年代には研究者の数も増え、90 年代に入ると研究にも多様な視点を取り込まれていく（cf. Deverson 1998; Gordon et.al. 2004 References）。このことは社会全般に national identity を模索する動きや NZ の英語の独自性とそのルーツを求める民族意識が働くようになったことと無縁ではないように思われる。

1980 年代半ば過ぎより開始されたコーパス研究の視点からの先駆的業績 Brown Corpus (1960 年代初頭書記資料)、LOB Corpus (1987 年書記資料)、そして LUND Corpus (1980 年口語資料) に触発され、ICE (International Corpus of English) Project に寄与する一貫として Victoria University の Janet Holmes (1996) は NZ 英語の特質を見極めるために実際の発話コーパスの収集を計画した。そのコーパスが Wellington Corpus of New Zealand English (略称 WCNZE) と呼ばれる。1988 年から完成までにおよそ 8 年をかけて収集された 100 万語の口語および同語数の文語の、総計 200 万語の、音声および書記資料の実際の収集方針と方法について述べている。それに基づいた多くの研究成果は個別に論文として刊行されてきている。

今世紀に入り、University of Canterbury の Elizabeth Gordon (2004) は、NZ 英語の歴史的起源の探求の視点から、Radio NZ が保存していた Radio New Zealand Archives の中から 1940 年代の口語資料が発見されたことをきっかけに 1996 年に ONZE: The Origin of New Zealand English project. とい

うプロジェクトを立ち上げた。このテープ音声記録は、1870年代に急増するNZへのゴールドラッシュ移民世代の子孫の言語状態を分析する貴重な資料と考えられたものを多量に含んでいて、幅広い時空間を占めるNZ英語の起源を探る上で重要なデータを成している<sup>27</sup>。

それら歴史的なデータと現代のデータを併せ、social identityにかかわる幅広い選択肢を意識して、選ばれた多様な言語資料の音声分析することで、NZへのcommitmentの濃淡、長短というindexを付けながら分析された言語資料はまさにidentityと使用言語の特徴の関連性を浮き彫りにするものとなった。その核心にはNZ英語らしさが何に由来するのかという設問があった。結論は、過去wishful thinking的に推測されていたCockney由来説などが否定される結果となった。明確に特定の要素に偏るものは見出し難く、多様な要素が多重的に今日のNZ的とされるものを構成することになったが、ユニークな歴史的条件下でイギリス南東部の言語的特徴がより多く保持されたであろうことが控え目に述べられる<sup>28</sup>。NZにおける移民、植民の多地域性、多民族接触の歴史を考慮すれば、それはおそらく真実に近いものであろうと思われる。Gordon et al. (2004:36-65)ではSinclairなどの歴史学の知見を参照し、言語変容に関わる言語外要因を究明しようとしたところが説得的である。

## 6. エスノニック・ディスコースの分析

エスノニムを核とした分析は国家/民族的(national/ethnic) identityの変容の問題と深く関わる。それは民族にかかわる帰属意識であり、それが強くなればしばしば愛国心と名付けられることになる。18世紀後半イギリスにおけるSamuel Johnsonの英語辞書(1755)の編纂のきっかけ、あるいはそれに先立つこと2世紀前のWilliam Bullokar, *Bref Grammar for English*, 1586などの綴り字統一、文法書の執筆の背後にある国家/民族主義的(nationalis-

<sup>27</sup> 結果的にRadio NZの先見性が卓越していたことが研究の隆盛につながったと結論づけることができる。

<sup>28</sup> 'The final result clearly owes much to south-eastern English English, but this could have come about in a number of ways.' (Gordon et al. 2004:256)

tic)な要因、あるいは大西洋を介して向き合う19世紀初頭アメリカ合衆国におけるNoah Websterの辞書(1828)やその半世紀前アメリカ独立直後の教科書編纂の背後に存在する隠れたnationalismと呼べるものと同様の力学がNZにおいて作用していたのかどうかを検討する必要がある。

国家/民族的帰属意識に深くかかわるものとして国家/民族のidentityの問題、権力の正当性(authenticity)がある。それは、独立を脅かす勢力との対立軸をもって形成され、他者との覇権争いに勝利することにより、いわば対外的にもたらされることが多いが、果たしてNZにおいて国家/民族的identityはどのようなきっかけで形を成すことになったのか。また20世紀後半に起きたNZ英語の研究は、どのような要因が絡んで展開していったのか、国家の独立とidentityの相関関係はいかなるものかについて考察を進めたい。

## ソースとしてのDNZE

冒頭に言及したDeverson-Kennedy(2005)の辞書の誕生には、先駆者Harold Orsmanの*The Dictionary of New Zealand English*(1997)[以下DNZEと省略]による豊かな地ならしがあった。副題(*A Dictionary of New Zealandisms on Historical Principles*)に示されるように、これは*Oxford English Dictionary on Historical Principles*の編纂方法を踏襲し、NZ発祥の英語(借入)語彙だけを歴史的原理に基づき、かつ国内地域間変異(例bach n.2.<NI>, crib n.2.<SI>)<sup>29</sup>にも目配りして編纂した、用例出典を定義の論拠として提示する学術的な辞典である。それは主に先住民族マオリ系の地名・文化(Maori, Maoritanga, tikanaga, Aotearoa, haka, Pakeha, takahe)と「後」住民族アングロサクソン系の言語、すなわち英語のNZ語法(bach, bluff, creek, jandal, pavalova, Enzedなど)という二つの異なる群を含む。主要見

<sup>29</sup> ただしその後の研究で知られるようになったpottle<SI>, punnet<NI>, chips<NI>についての言及は(見出し語を含めて見当たらない。小冊子ながらLeland(1979 orig.ed./1990 2nd.ed)にはpunnetの定義として北島用法<NI>と断って'a small open-topped...box of berries, e.g. strawberries.'が挙げられ、また他の項目についても地域的変種の注釈がある。

出し語数は約6,000、マオリ語700、スコットランド英語60を含むアングルサクソン系370語、オーストラリアと共通の700語、それに付随する独立下位見出し9,300語、引用例は47,000を数える。その内訳は384(18世紀)、12,500(19世紀)、34,000(20世紀)であった。これらは実際に収集されたものの4分の1から3分の1ほどに当る。当然のことながら、以上のような精緻で綿密な記述は、出版に至るまでの半世紀近いNZ英語に関するスカラシップの蓄積に助けられたことは疑いが無い。

例えば **New Zealand English** は主要見出し **New Zealand** の下位項目 (B. *attrib. or adj. and adv.*) として次のように定義されている。

(a) the variety of English written and spoken by native-born New Zealanders (and by others whose speech and idiom recognizably approaches that of the native-born) perceived as distinct in its features or usage from other varieties of English, esp. British, North American and Australian (see also KIWI 10, NEW ZEALANDISM 2, NEW ZILD A 1)<sup>30</sup>

1910 *Triad* 10 Aug. 37 **New Zealand English** Mr. E.W. Andrews, of the Napier Boys' High School, is an admitted authority on English. His presidential address, recently delivered at the conference in Wellington of the Secondary Schools' Assistant Teachers, is..the more interesting. The subject was 'New Zealand English'. 1966 TURNER *Eng. Lang. Austral. & NZ* 152 *Mullock* is less frequent and retains a specialist sense of 'rubbish from a mine'. It is not common in general New Zealand English. [...]

(b) all those parts of the English language used or understood by New Zealanders including those shared with speakers of other forms of English.

1979 *Heineman NZ Dict.* [Front Cover] The first dictionary of New Zealand English and New Zealand pronunciation. 1991 *Dominion* (Welling-

<sup>30</sup> ちなみに、以下の項目の初出年代を参照のこと：New Zealandism 2 (1957); New Zild A 1. (1966); Kiwi 10 (1981). 現代に近づくにつれて、より口語的な表現で代用されることが増えてきていることがわかる。

ton) 23 Aug. 1 When their projects are done, the countries will..have representative and comparable samples of written Australian and New Zealand English.<sup>31</sup>

その出現年代は1910年である。定義(a)によって、NZ Englishの示差的言語特徴が一当然のことながら学術的意味において---着目されるのは一世紀前、1900年という世紀の変わり目を越えた頃であると推察されるが、それが広く認知されるようになるのにおよそ半世紀を待つことになる。1910年以前にどのような非言語的背景---社会的歴史的变化---が言語的特徴の自覚へとつなげる影響力を持ったのかについても考察する必要がある。定義(b)は(a)の示差的特徴を含めたより広く包括的な意味での定義であるが、その使われ方は予想外に遅く1970年代の終わりに近いことに注目したい。その期間にどのようなエスノニムが出現したのか興味のあるところである。

## 7. NZのナショナリズム

イギリスが16世紀から18世紀にかけて整えて来た国家的自律性と独立性、アメリカ合衆国が1770年代の独立戦争を契機として18世紀から19世紀にかけて達成してきた国家意識に相当するNZの言語的独立意識は20世紀という歴史的経過において比較的短期間に生じていると考えることができる。

2. で扱ったNZの通史に加えて、特に複数の歴史家がnationalismについて立ち入った考察をしているものを、ここでは取り上げて論じておきたい。

まずSmith(2005)はその第7章に'Making New Zealand 1930-1949'という章題をつけ、その中で興味深い指摘をしている。

<sup>31</sup> 他方、DNZE(1997)の通時的記述方式を採らず、必要最低限の歴史的言及はするものの、基本的に共時的立場に立って上記エントリーを含む現代NZ英語<辞典>およびNZ固有名を含む<事典>の性格に徹したのがNZOD(2005)であった。そこでは**New Zealand English**は独立見出しとして以下のように定義されている：'the dialect of English spoken by New Zealanders' また**New Zealander**は'1. a native or national of New Zealand; 2. *hist.* (to about 1850) a Maori.'と簡潔である。

[...] a sequence of symbolic moves indicated that the Dominion had become a nation by the end of the 1940s. New Zealand finally ratified the Statue of Westminster in 1947 and so attained constitutional independence five years after Australia did, in response to the fall of Singapore. The 'Dominion of New Zealand' became 'New Zealand' in 1945 ...' (Smith 2005: 172)

世界に認められる国家として政治的自立を遂げるに至る 20 年という期間が文化的民族主義（国家帰属意識）の高まりの期間でもあったことが歴史学者の立場から推察されている。この記述で、旧宗主国イギリスの統治（する領土）を指す *dominion* という語が 1945 年に政治的には消滅することに触れているが、他方、その 6 年後に出版された、世界の多様な英語を紹介する Partridge & Clark (1951)（冒頭に言及した）の中の Orsman の *New Zealand English* に関する記述は *Dominions English* と章題を付けられた部分に含まれており、*Dominions* という政治的概念が言語学者の思考回路に刻み込まれていたことに刮目したい<sup>32</sup>。The Dominion of New Zealand は *New Zealand* の 1907 年以降の正式旧称で、さらに古くは *the colony of New Zealand* であった。上記に続けて、以下の記述がある。

'In retrospect the era between 1930 to 1949 proved to be one of cultural nationalism, state-sponsored under a long-serving Labour government, from the introduction of public radio in 1936 to state patronage of the arts, a national museum, art gallery and orchestra.' (Smith 2005: 172)

この間、公共放送、芸術などの分野での支援が 1935 年に成立した労働党政

<sup>32</sup> ちなみに *Dominion* は 1907 年に創刊された日刊新聞の名称でもある。1865 年創刊の *The Evening Post* と 2002 年に合併し *The Dominion Post* と改称して引き続き現在まで刊行されている。一世紀を超える歴史をもち Wellington 市を中心に講読される NZ の四大新聞のひとつである。

権の方針により積極的に行なわれてきたことが文化的ナショナリズムの興隆に貢献したと推察される。

ワイタング条約（1840 年締結）以前の NZ（アオテアロア）はマオリ民族のみの単一民族社会であった。条約締結後の植民地化による白人（パケハ）の長期間にわたる大量流入の結果、先住民は少数派となり、パケハによる政治的、経済的、文化的支配が続いてきたことはマオリ語とその社会の存続を危うくしてきた。NZ のアイデンティティを議論するには、先住民を無視することができない。しかしすでに述べた理由により、この問題は本論考の守備範囲を大きく超えるものであり、これ以上触れないことを断っておく。

さて Smith (2005) は特に 20 世紀前半の 30 年代、40 年代を NZ の国家建設（および国家意識）の黎明期とする見解を表明している。

'The 1930s and 1940s was a formative era in nation-building, through the conscious 'making of New Zealand. At the same time, New Zealanders had to 'make do' through depression and another world war, and these global onslaughts only intensified the quest for security at home and abroad. Making do and creating a nation moved in symbiosis because, as often happens with the evolution of a sense of national identity, panic, crisis, anxiety or rupture produces stories and rituals to soothe and explain.' [...] 'New Zealand's worst environmental disaster of the twentieth century, the earthquake reinforced the urge to rebuild.' (Smith 2005:150)

下線部に注目すれば、「(対外的な困難に直面して) その場しのぎ間に合わせ的に「国家」なる体裁を整えていくことと新たな国家像を意識的に形作っていくことが協力的に作用するのは、民族的出自（帰属）意識（national identity）の覚醒にはしばしば起こるように、恐怖感や危機感や不安や不和が、それ自体を宥め、説明するための物語や儀式を産み出すことになるから。」となる。

また、徐々に醸造されつつも未だ輪郭の明瞭でない民族意識の背を側面から押したのが 30 年代（1931 年）に北島東南部 Napier 一帯を襲った地震被害で

あるとの間接的ながら象徴的な指摘を付け加えているのは興味深い。

次に、詩人であり、また N.Z. の identity の問題をライフワークとして追究してきた歴史学者として Sinclair (1959/2000: 237-9) が異例のスペースを割いて民族意識、国家意識と NZ における英語の特徴とその普及状況との関連に言及していることに注目したい。

'Patriotism was confirmed by another sort of local pride. [...] Travel, in war or peace, and contact with new immigrants, different from those of other English-speaking peoples, of possessing, in subtle ways, a manner of life which, though not unlike that in Australia, England or California, had a flavour of its own. One focus of this sense of being different, and therefore of nationalism, was the local use of the English language.' (Sinclair 1959/2000: 237)

特に特定地域特有の英語が普及するについては、自己と他者の言語や慣習上の差異の認知と独自性への誇り、民族主義が、地域英語の使用の源であると述べる。NZ 英語の独自性とそれをめぐる自負が表明されるまでの道程について述べるくだりは、次の文章である。

'Writing in 1898, W. P. Reeves remarked that he had 'listened in vain for any national twang, drawl or peculiar intonation.' Perhaps, he had a poor ear, but in any case what is generally called 'the New Zealand accent' – though 'intonation' would be a more precise term – must have been the speech of a minority. By the time of the First World War it was probably characteristic of a majority of New Zealanders. It became the subject of heated controversy in which considerations of beauty or effectiveness of speech were usually lost amidst feelings of snobbery or inferiority, an inheritance from class-conscious Britain; for whatever else this local speech

may be, it is plainly not that approved by educated persons in the south of England. Only in the last twenty years has there been much disposition among educated people to accept the fact that there is a New Zealand form of spoken English.' (Sinclair1959/2000:237)

ここでいう最近の 20 年は 1970 年代 80 年代を指すと思われる。'down under' で一括されるこの地域と独特の響きをもつ英語に愛着を有する 19 世紀の少数派が英国支配階級の自民族中心的言語意識から解放され、20 世紀の多数派になるまでに相当の労苦を要したことに触れている。特に、出自も様々な子どもたちが学校教育の場で互いに交わし合い、調整し、身につけていったことばが NZ の話し言葉の特徴づけたと以下のように続ける。

'New Zealand speech developed among children, out of the babel of voices, they heard at school – or at home. It cannot, however, be explained simply as dialectal omelet. The contiguity of so many forms of English, for instance, made people very speech-conscious, a fact which might help to account for one of the characteristics of New Zealand speech at its worst – a peculiar inhibition, a seeking, as it were, to avoid all distinction.' (Sinclair1959/2000:238)

そして、NZ の地域英語を使用する心理的な要因も挙げられている。

'Another social attitude which led to the same result was the reaction of the mass of the settlers against the British class system and their antagonism towards the ruling classes. In New Zealand if a person used the intonation natural to an English gentleman he was likely to be considered to be 'giving himself airs'; to be 'affected', even effeminate. The local-born generally took care not to speak what is called 'standard English'; it was, in any case, the native dialect of only a small minority of immigrants. Lazy

speech, poorly produced and badly enunciated, was a frequent result.' (Sinclair 1959/2000:239)

それは英国社会階層制への反撥と支配階級に対する敵視であると率直に表明される。その結果、「標準言語」を敢えて使わないという選択があったようだ。

次に、NZ 国家の成立について、未だ完結していない民族意識の発露として捉えることができるとしている。

'When does a nation become a nation? In the sense that a nation is a group of people who, for historical or other reasons, consider themselves to be a nation, its rise is a process never completed. In the case of New Zealand no one could pretend that it has, even today, in all respects outgrown its colonial past and achieved cultural or political maturity; no one could imagine the presence of non-national attitudes among some sections of the community.' (Sinclair 1959/2000: 239)

また同じ文脈で consciousness of nationality が歴史的に形成されていくことについて触れている。

'The beginning of this consciousness of nationality are in New Zealand to be detected in the eighteen-eighties and -nineties. Thereafter two events were decisive. One was the decision not to join the Australian federation. [...] The decision not to federate with the Australian colonies committed the New Zealand Europeans, as it were, to continue the process of becoming New Zealanders. [...] The other decisive event was the First World War. For the first time the New Zealanders were involved in international responsibilities.' (Sinclair 1959/2000:239-41)

19 世紀の最後の 20 年間に散見される民族意識は 20 世紀に入ると 2 つの政

治的選択によって促進される。一つはオーストラリア連邦に加盟しなかったこと、もう一つは第一次世界大戦への参戦である、との指摘は示唆的である。さらに注目すべきは、1940 年頃までにはニュージーランド生まれなら自らをニュージーランド人と見なす人々が多数になっていたとする見方があることである。

'By about 1940, if asked to identify themselves, most people born in New Zealand would, without hesitation, have said that they were New Zealanders. But, again, what is a New Zealander? No international stereotype exists, as there does of the thrifty Scot, the wild Irishman, the drunken and chundering<sup>33</sup> Australian. [...] Has any local stereotype emerged? (Sinclair 1959/2000:367)

さて政治的視点を離れ、文学的視点からは New Zealand の民族的意識はどのように捉えられてきたのであろうか。Robinson & Wattie (1998) によれば、19 世紀末から 20 世紀を通して、最も民族意識を高揚させたのは 1930-40 年代で、その時期に作品を通して大きな影響力を行使したのは Curnow (詩) と Sargeson (散文) であったとする。前者は NZ のおかれた世界的地位から NZ のあるべき姿を追求し、現に存在する自然、営む社会、過去から続く固有の歴史に焦点を当てたそれはさらに WWII の勃発によってさらに強められることになった。後者は労働者階級男性の典型的 NZ 気質を土着のことば ('vernacular') で表現した。土着のことばとはいわゆるイギリス英語と弁別される NZ 英語の言い換えと見なすことができる。

'A shift in his [sc. Curnow's] poetic manner is observable in *Enemies: Poems* 1934-36...which reveals an awareness of contemporary English poetry...and a sharper consciousness of the New Zealand scene, both social and physical...These books displays a tight focus on details of New

<sup>33</sup> 'To vomit, to spew, esp. after excessive drinking.' (DNZE:148 s.v. **chunder**)

Zealand's landscapes and history and on its situation as a small island nation in the wider world---a consciousness further accentuated by the outbreak of war in Europe in 1939, and the wakening of the conflict to the Pacific from late 1941.' (Robinson & Wattie 1998:122 s.v. CURNOW)

'In prose, Frank Sargeson in the late 1930s invented a New Zealand idiom in a sequence of short sketches... Sargeson's New Zealand male---inarticulate, laconic, stoic and loyal to his mate---gave fiction a distinctive New Zealander and a dialect for him to speak.' (Robinson & Wattie 1998:392 s.v. NATIONALISM)

'More than any other works before them, Sargeson's stories captured working-class New Zealand vernacular, the society that gave rise to it and much of its inner spirit.' (Robinson & Wattie 1998:475 s.v. SARGESON)

King によれば、英国の歴史的栄光に束縛される前世代と異なり、現実の世界における島国 NZ の地位を客観的に凝視し、NZ に固有な自然と歴史的経験の描写に nationalist の視点を投影させていく彼らは cultural/settler nationalists と命名される。

'In the 1930s, however, dissenting voices subversive of that consensus began to be heard more often.' (King 2005: 380)

'These writers, who came to be known as 'cultural nationalists' or, to distinguish them from the aspirations of Maori, 'settler nationalists', stood in silhouette against the colonialist themes and preoccupations of the generation that preceded them, and against the Georgian ornateness of the writing of their predecessors... [...] the new breed of writers were seeking in their own genres what Allen Curnow called 'an unpromising fidelity to experience'. They were pursuing a 'New Zealand-centred truth' based on the notion that 'we [are] a nation with a history and a will of our own' (King

2005: 381)

社会の中核にいて影響力を持つようになった 1940 年代、50 年代生れの世代の偉大なる帝国の栄光に冷淡な態度を示す価値観に注目するのは Smith である。この世代の特徴として、英国文化へのこびへつらいと自文化の軽視の傾向はもはや失せ、逆に、既成の価値観に対して懐疑的で、生れも育ちも生粋の NZ 人としての identity を有し、自文化に自負をもつ地球市民としての自覚をもつ傾向にあることを指摘する。それは特に 80 年代の以降のことを示唆していると思われる。

'A new generation, men and women born in the 1940s and 1950s and raised in New Zealand, entered positions of power and influence. This new generation also formed a new class of professionals determined to attack the 'cultural cringe'<sup>34</sup>. Importantly, their counter culture convictions could be accommodated by existing myths. This urban, educated, post-war generation, reared to question standards and norms, embraced the youth revolution that made them global citizens. Simultaneously, they donned a 'made in New Zealand' identity in their passage to adulthood.' (Smith 2005:224)

Bailey はアメリカ、カナダ、オーストラリア地域の「新英語」を発展モデルの例として挙げたのち New Zealand について次のように記述する。

'New Zealanders, too, have very recently come to regard themselves as linguistically independent, parallel to their perceived political distance from

<sup>34</sup> **cultural cringe** an (Australian and New Zealand) attitude characterized by deference to the cultural achievements of other countries and disparagement of Australian and New Zealand culture. The term was coined by the literary critic A.A.Phillips(1900-85) in 1950. [Deverson (2005) *NZOD* s.v. **cultural**]

Britain (as a consequence of Britain's membership in the EEC) and from the United States (following New Zealand's withdrawal from the ANZUS treaty). If one listens, as I have had the pleasure of doing, to the "phone-in," "talk-back," or "call-up" radio broadcasts in all of these nations the emergence of evolutionary norms is clearly apparent.' (Bailey1990: 85f.)

国際情勢に関する国家の特定の政治的選択---一方では、英国の EEC 加盟の結果として英国から距離を置き、他方、アンザス条約から離脱して米国からも距離を置く<sup>35</sup> という選択---と呼応するように、言語的にも独立しているという意識が顕著になってきていることに注目する。これが 1980 年代の状況を示唆していることは明らかであり、Smith の歴史素描に通底するものがある。

McArthur (1992:695ff.), McArthur (1998:55) によると、NZ における英語使用の始まりは 1792 年とされる。それに先立つこと 20 余年前の 1769 年に Captain James Cook が英語を話す乗組員とともに NZ に到達したことが明らかになっている<sup>36</sup>。約半世紀後の 1840 年には Waitangi Treaty により、英語民族による Maori 民族の政治的実質的支配が合法化されることになる。大きな変化は移民数の増加である。30 年後の 1870 年代のゴールドラッシュは、NZ を人口動態的に急激にパケハ化する大きなきっかけとなった<sup>37</sup>。それはとりもなおさず、言語的に NZ の英語化に拍車をかけることになるのは明らかであった。

以上、管見ながら歴史学者や言語学者の nationalism に関するいくつかの言説に触れた。エスノニムの出現状況と歴史家の指摘する nationalism の台

頭ないし高揚とのマイクロな対応関係はかならずしも明瞭ではないが、マクロな照応関係にあることは疑えないと思われる。それについては、次の節で具体的に検討することになるが、national identity は基本的に年月の積み重ねの上に徐々に輪郭を形成していくものであり、その形成過程で社会的事件や政治的な紛争（対立、摩擦、対外戦争など）がその明確化のきっかけとして作用するのは確かであるにしても、歴史に名を残すエピソードがナショナリスティックな意識覚醒、高揚の原動力のすべてというわけではない。nationalism の底流となる重奏倍音があってはじめてそれが触媒として機能することを忘れることはできない。そういう意味で 1930 年代の Curnow, Sargeson が提唱した cultural nationalism が政治的な英国離れの時期を経て 1970 年代に開花したという Belich の歴史観は興味深い。

'There were also developments in cultural nationalism, beginning in the 1930s but really flowering from the 1970s. Writers, artists and film-makers were by no means the only people who 'came out' in that era.' (Belich 2006:38)

## 8. 歴史的文脈の中のエスノニム・ネットワーク

そこで Orsman (1997) からエスノニムとして機能する (1) New Zealand を筆頭とする国家/社会名称とその同義語、(2) 関連語として民族社会集団名称、(3) 言語名称、および派生語相当句を取り出し、以下に列挙し、時代背景を考慮しつつ、その出現の歴史的経過を辿ることにしたい。

### 8.1. 国家/社会名称としての用法

ここでは New Zealand, Aotearoa, the Long and White Cloud, God's Own Country, Enzed, New Zild などが分析の対象である。

クックが HMS Endeavour を指揮して到着した NZ はタスマンに由来する他称詞として始まり、先住民マオリ人の自称詞アオテアロア (Aotearoa) が既に存在するにもかかわらず、その後英国系白人に受け入れられていくことに

<sup>35</sup> 'February 1, 1985: New Zealand's anti-nuclear policy leads to the refusal of a visit by a nuclear-capable ship, USS Buchanan. The decision will gall the Americans and lead to the breakdown of the ANZUS pact.' (Dench 2005: 249)

<sup>36</sup> See also: Smith(2005:23): 'Unlike Tasman, James Cook actually crossed New Zealand beaches, literally and metaphorically, and became New Zealand's Pakeha storybook ancestor.'

<sup>37</sup> (1851) 133,900; (1861) 155,100; (1871) 256,300; (1881) 534,000; (1891) 668,700; (1901)815,900; (2001): 3737,277. <http://populstat.info/Oceania/newzealc.htm>

なる。いくつかの変種があるが、詩的すでに稀な名称 (Zealand) または擬人化された古風な連想の用法 (Zealandia) などに限定され、ライバルであるよりは相補的な形で使い分けられてきた。

**New Zealand**, *n.*, *a.*, and *abbrev.* Also early **New-Zealand**, **Newzealand**, **New Zealand**, **New Zeland**: with joc. pronunciation forms. **New Zillun(d)**, **Noo Zilland**, **NyaZilnd**...

1768 Cook *Journals* 30 July (1955) I. cclxxxii [Secret Instructions from the Admiralty] Or fall in with the Eastern side of the Land discover'd by Tasman and now called New Zeland.

**Zealand**. *Hist.* [Poss. Meant as an abbrev., or poetic use, of New Zealand, occas. shortened for reasons of metre as in quots. 1780, 1839] NEW ZLEALAND A 1.

1773 BAYLY *Journal* 17 Apr. in McNab *Hist. Records* (1914) II. 208 when they [*sc.* Capt. Cook's ship] came near the Longd. [*sic*] of Zealand they hawled [*sic*] up northerly & went into Dusky Bay. [中部省略] 1883 FERGUSON *Castle Gay* 3 From Zealand's hoary mountains to India's burning plans. *Ibid.* 101 When 'neath the swagman's weary load..Zealand's rugged hills I trod.

**Zealandia** [f.(New) *Zealand* + (Britann)*ia*] usu. Represented as a buxom young white woman with long hair, often bareheaded and dressed in a loose-fitting white robe.]

1. As an old-fashioned (usu. poetic) name for New Zealand, often ironically applied and not now seriously used.

1857 *New Zealand, or Zealandia, the Britain of the South*...By Charles Hursthouse, a New Zealand colonist. [Title: *NZ Nat. Bibliography* (1980) I.i 506: 'Zealandia' is omitted in the ti[t]le of the 2edn. of 1861: but see quot.

1861.] 1861 HURSTHOUSE NZ 260 Drowsy matrimonial four-posters give place, in Zealandia, to elastic iron bedsteads and hair mattresses. [省略]

Aotearoa はワイタング条約の後、かなりの時間が経過して公式に英語に借入されるようになったと推察される。

**Aotearoa** ...[NOTE] Usu. transl. as the LAND OF THE LONG WHITE CLOUD q.v. though 'Land of the Long Day (or 'Dawn'), or 'Land of the Long Twilight' have more to recommend them.

1. The North Island

1855 GREY *Polynesian Mythol.* [A translation of 23 of the legends of the Maori text *Ko nga Mainga a nga Tupuna Maori*...pub. 1854] 132 Ngahue went to seek a place where his jasper stones might remain in peace, and he found in the sea this island Aotearoa (the northern island of New Zealand).

1868 TAYLOR *Past & Present NZ* 193 The native name for the North Island is, Te Ika a [M]aui—the fish of Maui.; they have another ancient name for it in their legends, Aotearoa, but it is now never used. [省略]

2.a. New Zealand, esp. as the homeland of the Maori.

1864— [省略]

2.b. **Aotearoa New Zealand** a symbolic name coined in the 1980s to represent the Maori and Pakeha components of New Zealand society and culture.

1988 *Human Rights Comm. Focus* Mar. 1 Statement on the Status of Maori People as Tangata Whenua of Aotearoa New Zealand...The Commission recognizes the importance of Maori culture..to all people of Aotearoa New Zealand.

この語 (Aotearoa) は先住民マオリ民族の言語、マオリ語起源の呼称で、ここに示される年代はそれが英語に借入されるようになった時期を示している。

New Zealand という地名よりはるかに古い歴史を持つ<sup>38</sup>にもかかわらず、主に学術的用語として神話学などに限定されており、一般には馴染むことはなかったようである。それゆえもともとマオリ人の人口分布の高い北島を意味していたのもうなづける。2.a. では南島も含むいわゆる広域の NZ を指し示し、2.b. の使われ方（マオリ語と英語の併置）によって、Waitangi Treaty 以降初めて先住民マオリとの共生を公の場で宣言し NZ が二言語文化国家として再出発することを意味するようになったと了解される<sup>39</sup>。

次はマオリ語を語源とする Aotearoa の英語への翻訳借入語である。前出の Aotearoa が前世紀の中頃（1855 年）知られだしておよそ半世紀経て使われるようになったが、そのいきさつはつまびらかではない。初期の頃の単なる翻訳語と異なるニュアンスで揶揄的な用法を獲得するのはさらに半世紀後（1943 年）である。その社会的背景は推し量ることができる。

#### Land of the Long White Cloud.

1. Also **Great White Cloud**, and in various shortened forms. Occas. with lower case initials. The most popular of several translations of Aotearoa, adopted, often ironically, as a romantic appellation for New Zealand.

[1898 REEVES *The Long White Cloud – Aotearoa* (Title)] 1903 *TrNZI* XXXV. 180 The home of the Maori in the 'Land of Great White Cloud' may, perhaps, be long continued. 1917 *NZ at the Front* 54 You, too, in the Land of the Long White Cloud, will have a thought for us. 1918 *Chron. NZEF* 13 Feb. 4 May you return soon to the 'long white cloud'. [省略]

2. In jocular or ironic variations: (**land of the**) **long white shroud**, **land of the wrong white crowd**, **land of the long black cloud**.

<sup>38</sup> Aotearoa の語源は以下の通りである：[Ma. [...] *ao* cloud; daytime; world + *tea* white + *roa* long, tall; or *aotea* bird; or *aotea* (= *awatea*) with elision of medial /a/, daybreak dawn.] (*DNZE*: 13)

<sup>39</sup> Cf. McArthur (2002:388): 'Many Maori and their sympathizers prefer Aotearoa, on occasion the two names come together as the combination New Zealand/Aotearoa, and Aotearoa is slowly becoming better known internationally.'

1943 JACKSON *Passage to Tobruk* 23. In due course more men arrived from the Land of the Long White Shroud. [省略]

次に、固有名に由来しない表現をいくつか取り上げる。その代表が fern を換喩として用いた慣用句である。

**Land of Ferns** (s.v. **Land 2**. In phr. referring, often emblematically, to New Zealand (occas. to Maori New Zealander) or to districts within New Zealand:)

1910 COCKAYNE *NZ Plants & Their Story* 1 To be sure, New Zealand is known as the land of ferns, and not without truth. 1940 LAING & BLACKWELL *Plants NZ* 7 The ferns form such a prominent feature in the Flora, that New Zealand is often termed 'The Land of Ferns', and a fern frond has been taken as a emblem. ... [省略]

**Fernland 2**. Obs. [Cf. OED 2b 'applied, esp. by Australians, to New Zealand'.] With init. cap., a name given to New Zealand by non-New Zealanders.

1926 GREY *Angler's Eldorado* 29 The hillside there was covered with a wonderful growth of the tree ferns, which plant has given New Zealand the name Fernland.

NZ を表象するシダ fern の換喩用法は今世紀初めに登場する。同類の語に fernland があるが、一般化せず<sup>40</sup>、すでに廃用となっている。

次いで、*God's own country* も固有名に由来しない表現のひとつであり、かつ出所が明快なものと言える。NZ 国歌（'God Defend New Zealand'）の作者 Thomas Bracken の詩に現れ、19-20 世紀にまたがって首相を経験した

<sup>40</sup> *NZOD* s.v. **fern 2**. にも **fern country** (also **fernland**) *NZ* 用法として字義の意味 ('land covered with bracken') の記載しかない。

Seddon も用い、その影響で人口に膾炙した流行語と断定される。

**God's own country**<sup>41</sup> (s.v. **God's own**. Also **Godzone** (occas. **godzone**), **Gordzone**, **Gors Own**. In full **God's own country**)

1.a. As God's own country [orig. US.God's (own) country, 1865: see OED *country* 2b.] New Zealand regarded, often ironically ('God's own country, and the devil's own mess'), as an earthly paradise, a catchphrase popularized during the political times of Richard John Seddon (Premier 1893-1906)

1892 *Star* (Auckland) in Bailey & Roth *Shanties* (1967) 82 Give me, give me God's own country (from a spieler's point of view), Where the scripper and the sharper conjugate the verb 'to do'. 1907 *Truth* 13 Apr. 4 A cool 'thou.' Is not to be looked askance at any time, and taxing Chow as they enter Gordzone Country is a profitable bit of business. 1929 DEVANNY *Leone Devine* 20 [Richard John Seddon] the popularly acclaimed uncrowned king of the land he himself had named 'God's own Country'.

**God's own** *Ellipt.* Often in joc. From **Godzone** (**God-zone**, occas. **Gordzone**).

a. New Zealand.

1916 *Shell-shocks* 66 He [sc. Bill Massey] is sure to have all his works cut out in suitably replying to all the nice things people..will say about him and his Army of Heroes from Gors Own, down under. ...[省略]

b. attrib.

1979 *Listener* 7 Apr. 11 Out of the 'Godzone English' words on the Listener cover, all but two (kanga and kanuka) were already in the Hamlyn World Dictionary, published 1971. ...[省略]

<sup>41</sup> NZOD s.v. god の下位見出しには NZ 用法 (または豪州用法) として次の定義がある: 'NZ New Zealand (or Aust. Australia) regarded (often ironically) as an earthly paradise'

## Godzone<sup>42</sup>

1964 REID *Book NZ* 25 Despite their smugness, too, about the felicities of God's Own Country' ('Godzone' simply, to the irreverent)..New Zealanders are not completely lacking in..self-criticism. 1972 *Pavlova Paradise* 63 In Godzone you approach different topics with an adjustment of your volume control. 1985 SHERWOOD *Botanist at Bay* 45 'How long have you been in godzone? 'Godzone. Is that a Maori expression?' 'Godzone country..is our proud name for..New bloody Zealand'

以上の用例がすべて Godzone (短縮形) の見出しの中にまとめて記載されているのは、起源はともかこの語句が人口に膾炙される頻度が高くなるにつれ短縮されていった結果、Godzone が元の形を凌ぐほどの流行語となり、重要な役割を担うことになったことの証左であろう。

さて初期の頃の他の名称 Colony, Dominion も検討する。

## colony

2. Usu. as **the Colony**, New Zealand regarded as a country existing as a political or administrative whole.

1840 *Lord Russell to Hobson in GBPP House of Commons 1841* (No.311) 27

<sup>42</sup> Cryer (2002:87) は同じ見出しを設け、この語が NZ で広まった詳しい背景説明をしている。同時に Godzone の由来についても情報を付け加えている。'This is short for God's own country, meaning New Zealand, a phrase coined by Thomas Bracken in 1890. Bracken's words were: Give me, give me God's own country/ There to live and there to die/ God's own country, fairest region/ Nestling 'neath the Southern sky.' New Zealand Premier Richard Seddon boosted the phrase's popularity in 1906, after attending a conference in Australia. He sent a telegram home announcing that he was returning to God's own country. Seddon died the next day, but the phrase lingered on. It went through a slight semantic transformation when eminent poet Allen Curnow joined up the words and (slightly ironically) created a new word, Godzone, meaning New Zealand as a whole. Some scholars believe that troops fighting in the American War of Independence used exactly the same expression in 1865, more than 20 years ahead of Thomas Bracken.'

The colony of New Zealand will..be indebted to the colony of New South Wales for any advances made from the one treasury to the other...

もっとも初期に正式名称として New Zealand と同格併置されていたものが、単独で使われるようになった。1907 年の政体変更の際に名称が the Dominion と変えられた。

### Dominion

**1.a.** Also *joc.* **Dominyong**...New Zealand as a self-governing country of the British Empire (now Commonwealth), esp. as **the Dominion**, a designation or title accepted in 1907, formally defined in 1926 in the Balfour Report, integrated into the Imperial Statute of Westminster in 1931, and, being considered inappropriate as a descriptive title of an independent member of the Commonwealth, replaced by 'Realm' in the Royal Style and Title adopted in 1953. Contrast COLONY.

**1907** *NZ Gaz.* (Suppl.) in *Speech & Documents* (1971) 269 ..addresses were forwarded to His Majesty the King respectfully requesting that the necessary steps might be taken to change the designation of New Zealand from the Colony of New Zealand to the Dominion of New Zealand; ...

1907 年 Colony of New Zealand から the Dominion への変更があったことをこの例は示している。Colony の場合と同じように of を伴う同格併置句 (New Zealand) を省略する単独形で使われるようになるのにさほど時間を要しなかった。

次に、Enzed, New Zild は口語、俗語に属する言い回しであり、2 音節と簡潔なので、現在に至るもくだけたスタイルにおいて一般的に用いられる<sup>43</sup>。

<sup>43</sup> Cf. *NZOD* s.v. **Enzed** 'n. & adj. NZ & Aust. colloq.►n.1. New Zealand. 2. A New Zealand ►adj. New Zealand (*Enzed wine*)...'

**Enzed**.. Also **En-Zed**, **En Zed**, **N.Z.**

**A.n. 1.** New Zealand

**1917** *NZ at the Front* 56 Call I 'lucky' one who's surely dead? ...He has gone---just back to old N.Z. **1918** *Chron NZEF* 30 Aug. 57 Baseball---a game something similar to what is known in En Zed as 'rounders'

**New Zild** *n.* and *a. joc.* Also **Newzild**, **Noo Zild**. [f. a stereotyped 'broad', clipped pronunciation of *New Zeal(an)d* ]

**2.** New Zealand as a country or culture.

**1992** *Dominion Sunday Times*(Wellington) 23 Aug. 21 They work with familiar material, slyly inventing clichés as well as pure New Zild like white Valiants, but they look at it from a fresh angle. **1993** *Salient* (Wellington) ..Noo Zild..

次に二次的な名称について述べる。Island を用いた慣用表現である。前者には狭義 (Island 2.a.) 「北島」と広義 (Island 2.b. *pl.*) 「南北両島」の用法がある。前者のほうが歴史的に古い。

**Island**, *n.* **2.a** *Hist.* Orig. the North Island as a gloss for New Zealand.

**1816** KENDALL 12 Nov. in Elder *Marsden's Lieutenants* (1934) 132 The natives, instead of taking his part against us, encourage him to have the island. **1821** *Sugden to Earl of Bathurst* 18 Jan. in McNab *Hist. Records* (1908) I.516 A party about emigrating [sic] to New Zealand begs most respectfully to solicit the assistance of Government in their undertaking. I am (with several who have resided on the island) convinced an English colony would soon become flourishing and happy.

**2.b.** *pl.*, often with a modifier, as **these Islands**, **the New Zealand Islands**. New Zealand.

**1847** *Spectator* Jan. 2 (Wellington) in Miller *Early Victorian NZ* (1958) 149

[The 1846 Constitution Act] sweeps away the whole system of official machinery...all the 'Treaty of Waitangi' nonsense, and all the past Downing-Street plans for hindering the settlement of the islands. ..[省略]

これらはすでに知られている New Zealand と並行し共存する時代のいわば変種であり、いずれもまだ単なる地理的意味合いの強く、客観的、あるいは突き放す視線の感じられる名称である点が、上記のものとは異なる。

Island 系語彙に関連するものとして、さらに Northern Island/Isle (1773 初出), North Island/Isle (1773 初出), Southern Island/Isle (1773 初出), South Island/Isle (1773 初出) があるが、歴史的地理的名称と見なし、出現時期の記録までにとどめておく。

さらに、周縁的な---固有名ではないが慣用的に用いられてきた---表現に触れておく。Down under, down south, up north の3つである。

**down under** B.1. New Zealand, esp. as part of Australasia. 1905 *Daily Mail* (London) (?)24 Oct. in *Why the 'All Blacks' Triumphed* (1906) 21 Smith..is the champion hurdler 'down under'. ..[省略]

**down south**, *adv.* and *n.* Also often down South. [Local uses of down south esp. freq. in NZ, a country whose main axis is north-south.] Applied to any place considerably to the south of the speaker's geographical reference, esp. to the (southern) South Island.

B. *n.* and *attrib.* The South Island.

1906 *Truth* 7 Apr. 1 Bush whisky makes a boozier think the world is upside down. After three glasses of brand retailed by a down South publican. 1949 NEWTON *High Country Days* 69 Lofty in happy mood, and unfailing in his praise of his native province [Southland], delighted young Wallace with tall stories of 'down South.' ..[省略]

**up north**, *adv.* Also occas. with init. Cap. N. Used as a nominal or adverbial phrase referring or relating to any district north of the speaker, the

specific meaning often depending on the location of the speaker: e.g. '(to the North Island' (by South Islanders), '(to) Auckland' (by (southern) North Island speakers), or '(to) North Auckland' (by Auckland speakers).

1869 THATCHER *Local Songs* 6 Says he, Plummer's bound to go up North. And call upon his brother. 'Go up,' says he, 'towards Albertland' [sc. North Auckland]. 1874. ..[省略]

以上は、いずれも副詞的用法に起源を持ち、その転用として地域名称を指すことになった。その時期はいずれも 20 世紀初頭である。down south との関係の深いのは地域名称「南島」を表す次の語である。

**South**, *n.* 1. As **the South**, the (far) southern parts of New Zealand, *spec.* Otago-Southland. Cf. DOWN SOUTH.

1937 AYSON *Thomas* 115 The danger of tutu poisoning and the pleuro scare made constant observation of the cattle necessary, but all went well in this corner of the south. ..[省略]

## 8.2. 民族/社会集団名称としての用法

New Zealander について、初期には先住民マオリ人を指す用法と白人を指す用法が並行した。もともとマオリ人を指す用法が先行していたと推察されている。この意味は主に歴史的用法として現在まで生き延びている。

**New Zealander**. Also (usu. idiosyncratic) **New-Zealander** (as in NZPD 1899). **Newzealander**...; also occas. early **New Ze(e)lander** ...; also *loc.* **New Zillunder**, etc.

1. *Hist.* (except in occas. anthropological use). a. MAORI A1 and 2....[Note] With increasing European settlement after 1840, the term widened in application to include non-Maori immigrants (poss. the occas. use of native New Zealander from 1840 onwards implies a body of 'non-native New Zealanders'), and was replaced in its original reference by NATIVE or MAORI. In twentieth century mainly specialist use it occas. distinguishes

indigenous New Zealand Polynesians from other Polynesians.

1769 PARKINSON in Cook *Journals* facing (1955) I. 209 [Caption] New Zealanders Fishing

1. の用法がマオリ人を排除して白人（パケハ）だけを意味するようになるのは1848年辺りからであることがわかる。

2.a. In senses or uses excluding Maori: a non-Maori person, often spec. a white European, born or permanently resident in New Zealand. See also *Enzedder* (ENZED 2), *New Zilder* (NEW ZILD). [Note] The Europeans of 1830-50 were more likely to be referred to in writing as *Pakehas*<sup>44</sup>, *Pakeha-Maoris*, *whalers*, *immigrants*, *colonists* (often from a particular 'colony'; see quot. 1859), or *settlers* rather than *New Zealanders*; quot. 1848 may poss. refer to Maori.

1848 SELWYN in *NZ Part V* (Church in the Colonies XX) (1849) 81 And, as a natural consequence of the publication [of Selwyn's 'Protest'] in England, the Colonial police force, composed of English and New Zealanders, was the medium of communication to this large body of natives. 1852 SOUTHEY *Coll. Sheep and Wools* 61 In their social and commercial relations the New Zealanders have made great progress...

次の語は上記 **New Zealander 1** に呼応する用法をもつ。

**Zealander**, *Hist.* Also **Zealander**. [Poss. Ad. French *zélandais*: OED 1773] NEW ZEALANDER

<sup>44</sup> Pakeha A.1. A pale-skinned non-Polynesian immigrant or foreigner as distinct from a Maori; thendem, a non-Polynesian New Zealand-born New Zealander esp. if pale-skinned. Europeans as an ethnic category. [DNZE 567] 初出年代は1814年頃である。

1. a Maori...

1773 BAYLY Journal 12 Apr. in McNab *Hist. Records* (1914) II.207 The Zealanders never eat greens of any kind, nor do they seem to be the least affected with scurvey[sic].

**Enzed..** Also **En-Zed**, **En Zed**, **N.Z.**

2. A New Zealander; spec. in WW1, New Zealand soldier. [AND<sup>45</sup> *Enzed* a New Zealander, 1915]

1917 *Press* (Christchurch) 29 Dec. 9 The 'Fernleaves' are known as equally courageous in battle and industrious in trench making... The forces call each other respectively 'Aussie' and 'Enzeds'.

アクロニムを起源とする口語、俗語表現として大いに多用されるこの表現は、およそ一世紀の歴史を持つ。ここでは第一次世界大戦に参戦した兵士に言及した用法が見られる。レジスター的に同レベルの俗語 Aussie との明白な対としての用法が印象深い。[2.の意味で初出は1915年 (Wikes 1978/96:148). Morris 1898には出現しない。] これに接辞 '-er' を付加して *Enzedder* が成立するのにさほどの時間は経たなかった。第一次世界大戦の時代にいわばやはり言葉のように生まれ広がった可能性が高い。おそらく欧州戦線への参戦<sup>46</sup>が

<sup>45</sup> *Australian National Dictionary*

<sup>46</sup> 'April 25, 1915: The Australian and New Zealand Army Corps, including 3100 New Zealanders, is landed at Anzac Cove, Gallipoli, only to find the Royal Navy has put them ashore in the wrong place. They are on a narrow beach surrounded by steep hills that will prove to be impossible territory for infantry.' (Dench 2005: 147) これに関連して2005年4月25日 Anzac Day に Auckland に滞在していた筆者は激戦地トルコ Gallipoli (Chunuk Bair) での90周年追悼集會に Helen Clark NZ首相、John Howard 豪州首相が参加したニュースが大々的に報道され、また NZ国内での公式行事の盛大だったことが印象深く未だ記憶に新しい。以下の Clark 演説には NZにとってのこの戦の世界史的意義が示されている。'Such was the impact of that landing, and the catastrophe at Gallipoli which was to follow, that this anniversary day, April 25th, has long been our national day of remembrance for all New Zealanders who died in the service of our country overseas. [...] Earlier today we stood at ANZAC Cove as

深く関与していると推察される。

**Enzedder** (also **N.Zedder**, **N-Zer**, **N.Zder**)

**A.** A New Zealander

**1917** *NZ at the Front* 79 And there arose a certain Bull which had his Ring not far from the En Zedders. **1918** *Chron* I heard a Tommy telling some Enzedders that they didn't speak proper English.

**Newzie.** ...A (former) familiar term for a New Zealander.

**1946** SOLJAK *NZ* 117 New Zealanders have coined or adapted many expressions to meet local requirements, as illustrated by the following. *Newzie*: New Zealander.

*Zealander* の後半部 (-lander) 省略によって生まれた *Newzie* は現在ではあまり使われず、それに代わる新たな口語、俗語的表現が次の *New Zilder* であろう。

**New Zilder, the '(stereo) typical' NewZealander...**

**1966** ACKER *New Zild* 7 Newzilders speak New Zild.

**Aotearoian, Aotearoan, Aoteroan.**

A New Zealander; occas. as an adjective, NEW ZEALAND B 2.

**1961** [see 2 a above (as adj)]. **1988** *Dominion* (Wellington) 1 July 10 All over the world isolated pockets of white and Maori servicemen and women, as well as those in the two divisions, referred to themselves proudly as Kiwis or New Zealanders, not Aotearoians. **1988** *Dominion* (Wellington) 24 Dec. 8 We have a long and proud history as 'New Zealanders', a concept that would never be carried in a word like 'Aoteroans'. **1993** *Listener* 8 May 7 If

dawn rose, recalling the early hours of the Gallipoli landing. Now we stand on high ground at a place of special significance to New Zealand. [...] ANZAC Day is never a day for celebration. It is a day for reflection and remembrance. It is also a day for committing ourselves to working for a world where difference between nations can be resolved without resort to war. In this way we can best honour and pay tribute to the fallen and to all those who served.'

(<http://www.beehive.govt.nz/Print/PrintDocument.aspx?DocumentID=22815>)

all New Zealanders were brought up understanding Maori...Then..we would all be New Zealanders---or should that read Aotearoans?

この語は既述のマオリ語 Aotearoa に由来する造語ではあるが、用例から推察される限り、既存の New Zealander や Kiwi と連想的意味において対立する、ポジティブでない仮名の命名であり、マオリとパケハの民族的統合、実質的な多文化社会化という現実が生じない限りは、多分に懐疑的なもしくは実験的な命名のままとどまると思われる。

**Godzoner**, a New Zealander

**1979** ASHOTON-WARNER *I Passed This Way* (1980) 172 Norma's nine children, have as many good looks as any other Godzoners.

これは **God's own** の俗語形 **Godzone** に接辞 ('-er') を付加して派生した語であり、元は Seddon の用いた **God's own country** に遡る。口語で用いられる。

**Fernleaf, 2.** *Hist. a.* mainly *pl.*, also *attrib.* A New Zealander, esp. (from the fernleaf badge worn) [Cf. Partridge 1937s.v. **fernleaves** '..esp. NZ soldiers']

**1916** *Chron.NZEF*..15 Nov. 127 Call them 'Overseas soldiers' or 'Downunder' men... Call them 'Cornstalks' or 'Fernleaves'—all out for a fight—But don't call them Anzacs, for that isn't right. **1917** *Chron.NZEF* 17 Jan. 223 What strikes me most about the Fernleaf crowd is their beautiful humility respecting the merits of their own country. **1917** *NZ at the Front* 134 First Fernleaf: 'I had a trouble getting mine' [*sc.* riding breeches] off a dead Ossia at Gallipoli.' Second Fern leaf: 'Dunno, Bill.' ...[省略]

**fern 2.**(18) **b.** *fig.* and *transf.* Symbolic or characteristic of New Zealand: esp. in earlier use a New Zealand rugby union representative, and in later use a New Zealand netball representatives (in *pl.* as *the Silver Ferns*, the national representative netball team), thence ...[省略] **1908** BARR *Brit. Rugby*

*Team in Maoriland* 49 Britain was given more than a reasonable chance against the wearers of the silver fern. ...[省略]

これらは NZ に自生する植物名からの換喩であり、NZ の emblem (**fernleaf** 1.1905 年初出) となっているなじみ深いものである。スポーツチームや軍隊のメンバーの意味で同じ意味発達を遂げた kiwi は fernleaf より歴史が長く、多義的に発展性のあるものとなっていった。

以下もっとも古くから (18 世紀以降) 用いられた歴史的呼称 English, European, Pakeha を取り上げる。まず English と European は元々の出身地を狭義に指す言葉であるが、ここでは後述する Pakeha と同義で、広義な意味を賦与されている。移民初期の時代のおおざっぱな民族観の表われであると推察される。

**English 1.b.** European, PAKEHA 1a

1852...*Agreement between Government & Native Tribes for..Gold Fields on the Thames* in Swainson Auckland (1853) 157 All owners to be free to dig Gold on their own land, without payment to Government, but not to permit other persons, whether Natives or English, to dig without a License. ...[省略]

**European A.** ...a non-Maori white immigrant, later resident of, New Zealand.

[1778.. ] 1817 KENDALL 25 July in *Elder Marsden's Lieutenants* (1934) 141 The natives approve of Europeans settling amongst them, through motives of self-interest.

Pakeha はマオリ語起源の語で、マオリから見た非マオリ系、つまり白人の総称である。多文化言語社会を標榜する今日、以前より一般化していると言える。

**Pakeha...A.1.a.** A pale-skinned non-Polynesian immigrant or foreigner as distinct from a Maori; thence, a non- Polynesian New Zealand-born New Zealand esp. If pale-skinned. In *pl.* Europeans as an ethnic category...

[1814...] 1817..NICHOLAS NZ I. 181 We could easily perceive.. that the packaha, or white man, was the subject of some extraordinary remarks.

さらに、いわゆる典型的なエスノニムにとっては周縁的であるが、NZ 人を指す特異な例として取り上げるべきものに ordinary bloke/joker がある。

**ordinary bloke** (or **joker**). Also with various collocations of **average**, **ordinary**, **real** with (**Kiwi**) **bloke** or (**Kiwi**) **joker**, the stereotypical New Zealand male regarded (often with disastrous consequences) as a touchstone of modesty and good commonsense. Also *joc.* **ordinary blokess**. Similarly, a female (see quot. 1992). Cf. good keen man (GOOD a.3).

1959 *Review* 16 Nov. It is a candid look at the present-day New Zealanders..the ordinary joker in [a] tartan shirt with his do-it-yourself concrete mixer...The practical, unimaginative, adaptable, prejudiced, smug, kindly, resilient, casual, slangy, independent, open-hearted she'll be right New Zealander.

この語が用いられる文脈が象徴するように、1950 年代に興味深い NZ 人のステレオタイプが生まれたことに注目しておくべきであろう。

その他に 20 世紀後半に Mainlander; South Islander, North Islander も使われはじめるが、NZ 国内の地域間差異が焦点化される ethnonym に関しては周縁的事例とみなし、初出年代を記載するにとどめておく。

**Mainlander. 1.**Chatham Islands. A Person from mainland New Zealand. (1950)

2. SOUTH ISLANDER a. (1955)

**South Islander. a.** 'One (occas. specifically a Maori...) born or resident in the South Island of New Zealand.' (1873)

**North Islander.** One (occas. specifically a Maori...) born or resident in the North Island of New Zealand. (1850)

**southerner 1.** 'One from the (often, southern) South Island' (1925)

North/South Islander については起源的には先住民民族マオリを指していたものが、広義に用いられるようになった歴史的経過がある。

なお北島に関して southerner に相当する語 northerner は記録されていない。

### 8.3. 言語/文化/精神<sup>47</sup> 名称としての用法

**New Zealand English** (s.v. **New Zealand B. attrib. or adj. and adv.**) [6. での既出部分に引用例を付加して再録]

(a) the variety of English written and spoken by native-born New Zealanders (and by others whose speech and idiom recognizably approaches that of the native-born) perceived as distinct in its features or usage from other varieties of English, esp. British, North American and Australian (see also KIWI 10, NEW ZEALANDISM 2, NEW ZILD A 1)

**1910 Triad** 10 Aug. 37 **New Zealand English** Mr. E.W. Andrews, of the Napier Boys' High School, is an admitted authority on English. His presidential address, recently delivered at the conference in Wellington of the Secondary Schools' Assistant Teachers, is..the more interesting. The subject was 'New Zealand English'. **1966** TURNER *Eng. Lang. Austral. & NZ* 152 *Mullock* is less frequent and retains a specialist sense of 'rubbish from a mine'. It is not common in general New Zealand English. **1984**

<sup>47</sup> 「精神」はここでは「民族性、民族魂、民族精神 ('ethos', 'psyche')」などを指し、具体的には接辞 (-ism, -ese, -dom, -ness, -tion, -ish など) を含む 에스ノム語群を便宜的に包摂するための仕掛けである。

*Listener* 21 Jan. 30 There are entries

(b) all those parts of the English language used or understood by New Zealanders including those shared with speakers of other forms of English. **1979** *Heineman NZ Dict.* [Front Cover] The first dictionary of New Zealand English and New Zealand pronunciation. **1991** *Dominion* (Wellington) 23 Aug. 1 When their projects are done, the countries will..have representative and comparable samples of written Australian and New Zealand English. **1994** *Cambridge Hist. of Eng. Lang.* (L. Bauer 'English in New Zealand') V. 401 Most of the vocabulary that is found in New Zealand English is general to all varieties of English.

(a) も (b) もどちらも冗長な表現で、学術的、教育的文脈でのみ用いられてきており、特に前者の狭義用法も後者の広義用法で純粹に学術的な専門語と言ってよいだろう。前者は1910年という早い出現時期が第一次世界大戦の直前の時代背景と重なり、愛国的響きを漂わせているのかもしれないと思わせる。'the more interesting' という表現がこの表現の「新奇さ」を物語っているように思われる。これを受け継いで、人口に膾炙することになるのは口語的によく使用される縮約形のほうであった。

### **New Zealandism.**

#### **1a.** NZ national spirit

**1921** *Quick March* 10 Feb. 65 Certainly, the war fostered a strong show of 'New Zealandism' and the pride of the New Zealand soldier in his country was strong and determined, even if it was not so aggressive as the nationalism displayed by the 'Aussie'.

#### **1b.** the characteristics...associated with New Zealand or New Zealanders.

**1961** *Education* Feb. 29 [James K. Baxter writes:] In the late forties and the fifties, a number of poets seceded from the self-conscious New Zealandism of their immediate predecessors and began to write simply as

people who happened to live in a given time and place... Mr Oliver's lucid account of the development of New Zealand poetry..should provide a salutary antidote to Mr Curnow's New Zealandism.

2. an idiom, word, pronunciation or turn of phrase distinctively characteristic of, but not necessarily exclusive to, New Zealand usage. See also *New Zealand English* (NEW ZEALAND B 4b(a)).

1957 *Listener* 22 Nov. 4 'Creek' and 'paddock' are New Zealandisms, because they mean something quite different in the English of England. 1964 ROSS & MOVERLEY *Pitcairnese Language* 13 Also [thanks] to..all those who kindly answered the two letters which I published in New Zealand about possible newzealandisms in Pitcairnese ('Words from Pitcairn') 1966 TURNER *Eng. Lang. Austral. & NZ* 120 The expression *busting ones guts out* is a common New Zealandism. Ibid.164 The term New Zealandism is used for a linguistic peculiarity of New Zealand English. 1989 *Pacific Way*. Jan. 11 If I continue in this vein, suggesting that most New Zealandism are in truth simply mistakes, my compatriots will go berko<sup>48</sup> at me.

McArthur (1992:697f.) ではこの語 (New Zealandism) に独立見出しを与え、その成立が 20 世紀であると漠然と説明しているが、それはおそらく Orsman (1997:534) の以上の記述を踏まえていると推察される。

## New Zealandese

1.c. [Poss. An error or influenced by French *néozélandais(e)*] The Maori language

c1909 BELLINGHAUSEN *Journal* (c1820) transl. in Murihiku (1909) 240

<sup>48</sup> Go berko: to go 'berserk', to become uncontrollably violent or emotional (Orsman 1997: s.v. **berko**)

I then explained to him [Sc. the Maori] that I wanted some fish, pronouncing the word in New Zealandese 1941 BAKER NZ Slang 58 New Zealandese, a term used before the native language of this country became known by the name Maori.

この語は元来先住民族マオリ語を指していたようだが、ほとんど同時期に次の用法も生まれ、ある時期並行していたと想像される。

2. Distinctively NZ English or idiom

1900 LLOYD *Newest England* 136 'Social Pests' is New Zealandese for land monopolists. 1939 MCKINLEY *Ways and By-ways* 111 'I go crook?' Oh, that's simply New Zealandese for 'Pourquoi s'en faire?' 1944 *Listener* 16 June 2 I suggest it is time people realized that English is not spoken in New Zealand The language we speak is New Zealandese, with its own idiom and pronunciation, and this is just as distinctive as the language spoken by Americans, South Africans, Australians or Canadians. 1966 ASHTON-WARNER *Incense to Idols* 162 'What does that mean? "there's not a show"?' ... 'It means "she hasn't got a chance". New Zealandese.'

しかし英国を中心とする英語移民が増加しその地域が広がることにより、マオリではなくパケハに関連する用法を獲得するに至ることがわかる。

New Zealand を語幹とするこの他の派生語として、19 世紀に New Zealandize (*obs.* 'to turn into a Maori' 1835), New Zealandic (1874)、20 世紀に New Zealandish(1963), New Zealandness (1985), New Zealandization (1986), New Zealandiana (初出 1988), New Zealandophile(1988), New Zealandize ('to make (a thing, person, institution) NZ in character' 1993) などが相次いで生まれた。特に 1980 年代に集中している点に注目すれば、後述する Kiwi の派生語の発生分布と同様の傾向を示している節が窺える。

**New Zild**<sup>49</sup>,

1. New Zealand English

1966 New Zilders speaks New Zild. 1972 You must understand New Zild as she is spoke. Elocution teachers sometimes say that New Zild is only lazy speech. In fact New Zild is a substitute for speech. 1984 ...[省略]

**Enzed**

B. *adj.* Of, from, or pertaining to New Zealand.

1918 *NZ at the Front* 65 Would that our ain folk knew what an En Zed mail means to us. 1926 LAWLOR *Maori Tales* 20 Official Enzed time. 1929 MILTON *Love & Chiffon* 164 Good old N.Z. mutton.

**Kiwi**

最後に **kiwi** という今日もっとも NZ 的な語を、その意味の変遷を辿りながら分析する。本来上記二つの名称の項目の下でそれぞれ別に議論すべきものであるが、多様で広がりのある用法を有するが故にあえてここでまとめる。

**kiwi** はマオリ起源の NZ の固有生物種として 19 世紀に入ると英語に借入語として出現する。初期には reduplicative を含め、いろいろな語形が記録されるが、最終的には現用形ひとつに収斂されていく。

**kiwi** Also early **kivi** occas. reduplicated **kievi-kievi**, **kivi-kivi**, **kiwikiwi**

1. Any of the three species of flightless nocturnal birds of New Zealand genus *Apteryx*[...]

[1820 LEE & KENDALL *NZ. Gram.&Vocab.*164 Kiwi, s. Name of a certain bird.] 1835- YATE *NZ*(1970) 58 *Kiwi*---The most remarkable and curious bird in New Zealand.

2. The three species of kiwi are indicated by various modifiers compromis-

<sup>49</sup> <http://www.nzonscreen.com/title/new-zild-2005> では、この語を含む "New Zild---The Story of New Zealand English" という 2005 年放映の番組を視聴できる。

ing, either singly or in combinations, the colour epithets...

1871 *Apteryx mantelli*... Brown Kiwi. ...[以下省略]

3. As an emblem of New Zealand

1898 *AJHR F-1 v Sixpence (Sap-green)* [postage stamp]---Representation of Kiwi regardant, surrounded by semicircular band of solid colour, bearing the words 'New Zealand' in white letters, and supported by oblique labels, 'Postage', 'Revenue', on left and right respectively. [...] 1966 *Encycl. NZ*.571 The kiwi..as a national emblem is of comparatively recent date. It was used after 1911 in the badge of the 2nd South Canterbury (Territorial) Regiment and became widely known from the giant kiwi carved on the chalk hill above Sling Camp, England, during the First World War. After 1940 the kiwi became synonymous with New Zealand servicemen overseas. The Kiwi Concert Party, which toured many battle areas during the Second World War, and the Kiwi (New Zealand Army) Football Team, which toured the British Isles, France and Germany in 1945-46, greatly enhanced the emblem's popularity... More recently, the kiwi has become the emblem used by New Zealand rugby league representative team.

1966 年の上記用例は **kiwi** の世界大戦参戦に端を発する 20 世紀における比喩的転義の過程を歴史的に辿っているもので、初出例ではないが引用した。

4. Usu. *pl.* as **the Kiwis**, in names of troupes, (touring teams), etc., or in *sing.* as the name of an individual member of such a group.

a. A women's hockey team in Wellington c 1908.

1908 *The Spike* (Victoria College) VII. No.1 June 44 V.C. v Kiwis. Win 3-0. At last the pride of the victorious Kiwis has been humbled in the dust [by the Victoria College women's hockey team].

b. *WWI*. A (pierrot) troupe of NZ Expeditionary Force entertainers; a NZ Divisional concert party.

1912 24 Aug. in *Camps, Tramps & Trenches* (1939) 123 The 'Kiwis', the New Zealand Pierrots.

c. WW2. The familiar name of the Kiwi Concert Party, during WW2 and after.

[1941 *NZEF Times* 18 Aug.8 A recent visit to the rehearsal room of the Kiwi Concert Party revealed that a bigger and better show is in the course of production.] 1950 *Programme 'The Kiwi Revenue Company'* (printed Wellington 1950) ...The Kiwis Producer and the Musical Director...[who has] been with the Kiwis ever since their inception in the Middle East I 1941...

d. WW2. The 2NZEF rugby union football team during WW2, and briefly after.

1946 [省略]

e. The NZ representative rugby league team (as distinct from ruby union **All Blacks**).

1966 [see 3 above]

5. Frequently in propriety names or brand-names, or trademarks. a. Various examples.

1905 [省略]

b. As **Kiwi (boot, shoe) Polish**. [AND 1910 (patent)]

1919 [省略]

6. As a pseudonym in authorship: the first two uses recorded in the *NZ National Bibliography* are in Vol.3, pp.228 and 60-61.

1896 [省略]

7. Occas. in WW1, but mainly in WW2.

a. NZ soldier<sup>50</sup> (Often humorously pronounced /kaiwai/, perhaps in imitative guying of the pronunciations of US servicemen.) (a) *WW1*.

<sup>50</sup> "The intellectuals...were more aware of the need for assurance as to their identity.

1918 *Chron. NZEF* 21 June 225 We christened the Adjutant 'Kiwi'—the symbol of En-Zed.

(b) *WW2* and later.

1941 HAWDON *NZ Soldiers in England* 8 Watch the antics of the 'Aussies' and 'Kiwis'.

b. As a form of address, occas. to a woman (see quot.1947)

1918 *Chron. NZEF* 10 Apr. 101 'Say Kiwi, some coot told me you were a wingless bird' ... [...] 1947 *Sports Post* Wellington 16 Aug. 9 she was surprised to hear a bus driver hail her, 'Hello, Kiwi'.

c. As /ki-iwi/, a chant or call of encouragement to a New Zealander or New Zealand team at an international sports meeting, test, match, etc. 1992 [省略]

8. Usu. With init. Cap., a New Zealander, prob. orig. applied to a white male. Cf. ORDINARY BLOKE for stereotypical phrases (as *ordinary*, *real Kiwi*, etc.).

1916 [省略] 1949 PARTRIDGE *Dict. Slang Addenda* 1093 Kiwi.2. A New Zealander: Australian coll.: C.20. [Wikes 1996:22 では初出は 1935; Green 1998:700 では 1910+]

9. *Transf.* the name of a coin

1946 [省略]

10. a familiar name for distinctive *New Zealand English*

1981 MARSH *Black Beech & Honeydew* 202 It is good honest kiwi to kick the English language into the gutter. 1983 *Landfall* 147 277 We generally laughed as he practiced his Kiwi..or spoke Cockney. 1988 *Pacific Way* June

They wished for precision, whereas the 'digger' of the First World War had been content to feel that he was an 'Anzac', the 'dig' of the Second World War that he was a 'Kiwi', without asking further questions... ' (Sinclair 1959/2000: 366) [下線部は筆者] Kiwiの初出時期とSinclairの説明 [下線部] がかなりずれているのは、人口に膾炙した時期との時差があるためと推測される。

27 Names..are supplied, as is what the author calls 'A Crash Course in Kiwi', a linguistic guide for the unwary. **1991** *Onslow Parish Newsletter* 26 July 1 We've now translated it into 'Kiwi'.

**11.** *Goldern Kiwi*. ['a national lottery, introduced in1962...']

**1962**-[省略]

**12.** Mainly in non-New Zealand use, kiwifruit

**1972** *Daily Colonist* (Victoria, B.C.) 2 Aug. 19 Have you noticed a small brown fruit called kiwi in local markets lately?..Sometimes called a Chinese gooseberry. **1973** *Sat. Rev. Soc.* (US) Mar. 53 Twenty-six different crops, most of them fruit--almonds, apples, kiwis, nectarines, olives. **1982** BURTON *Two Hundred Yrs. NZ Food* 138 'Kiwifruit' is an embarrassingly contrived name, but..it seems here to stay. Thankfully, however, the name has been shortened to plain 'Kiwi' in our major markets in the United States and Germany.

**13.** in the phr. **As hard to catch as a kiwi**, very elusive

**1953** REED *Story of Kauri* 251 He is a very busy man, and often from home, and we were told that he was 'as hard to catch as a kiwi.'

**14.** *attrib.* in a sense 'characteristic of or pertaining to New Zealand or New Zealanders', passing into adjectival use, usu. With init. cap., and often forming the second element of an adjectival comb.

**1941** *NZEF Times* 22 Sept. 13 A Brave Kiwi soldier

3以下の用法は、19世紀末より生じ、元の意味からの隠喩的転義である。「国家の表象」から「国家の中の集団」を、そしてさらに「国家の中の個人」を表すようになる。その転用が多岐にわたることに注目しておきたい。その造語力の強さは、以下のように複合語や派生語へと展開する中であらわになる。

**15.** Special Comb. [...]

**Kiwispeak** broad New Zealand Speech (s.v.**Kiwi** 15: p.415 middle/right

column)

**1990** *Dominion Sunday Times* (Wellington) 25 Feb.24 [Heading] Kiwispeak gets a raw deal...But there's nary a sign of lurgy, surely just as valid in Kiwispeak. **1992** *Dominion* (Wellington) 21 Apr. He overlooks the worst aspect of kiwispeak, namely, the nasalization of the means of (voice) production

**16. a.** In comb. Prefixed to words and particles to form adjectives...**kiwi-like**  
**b. Kiwian** a New Zealander

**1918** *Chron. NZEF* 16 Aug. 31 It could not be contradicted that the **Kiwians** were now making a step or two forward in the war.

**Kiwiana**<sup>51</sup> 'any of many 'collectibles', items redolent of New Zealand life and culture...'

**1989** BARNET & WOLFE *New Zealand! New Zealand! In Praise of Kiwiana* [Title] **1990** *Listener* 8 Aug. 12 It follows that the icons of Kiwiana, so many of them drawn from advertising's rose-coloured world, amount to a fairly one-sided view of New Zealand

**Kiwiafy**<sup>52</sup> to make (the making of) a person or thing New Zealand in character

**1996** *Evening Post* (Wellington) 27 Jan. 11 '[Dame Cath Tizard] **Kiwi-afied** the position.' Says old friend and former colleague..Phil Warren.

**Kiwicization**

**1986** *Dominion* (Wellington) 6 June 8 NZPOD [Pocket Oxford

<sup>51</sup> 'A word immortalized by researchers Richard Wolfe and Stephen Barnett, whose various books on New Zealand's social history unearthed a tonne of nostalgia and uncovered surprising amounts of Kiwi ingenuity, advertising, customs, preferences and attitudes, all of which add to the background and heritage of any person known as a New Zealander. Kiwiana sums the situation up perfectly and is defined by the *Oxford Dictionary of New Zealand English* as 'items redolent of New Zealand life and culture!' (Cryer 2002:119)

<sup>52</sup> Cf. *NZOD* s.v.**Kiwify**: '*v. colloq.* give a person, institution, etc. a New Zealand character.'

Dictionary].is..a somewhat careless cosmic **kiwicisation** of a British prototype, Allen's 'POD of Current English'.

**kiwification**

1986 *Dominion* (Wellington) 26 Apr. 7 It is the first that is the true test of **Kiwification**: of how deeply the editor has delved into the base test to transform it from something alien into something indigenous.

**kiwified**

1993 *Dominion* (Wellington) 25 May 22 But with its imaginative, more **Kiwified** set..it is very much a New Zealand show.

**Kiwidom**<sup>53</sup> 'the body of NZ culture & ideology'

1984 *National Bus.Rev.* 30 July 14 It could well have been said – again – last week that Sir Robert cut across the prevailing mood of **Kiwidom**. ... [省略]

**Kiwihood**<sup>54</sup> *ironic*. 'The state of being a stereotypical New Zealander'

1987 *Dominion Sunday Times* (Wellington) 27 Dec. 6 Sportsmen like Sir Edmund Hillary and Colin Meads become archetypes of sainted **Kiwihood**. [省略]

**Kiwi-ish** 'suggestive of royal but stereotypical New Zealand'

1986 *Listener* 8 Nov. 8 Apologists for modern journalese and **Kiwi-ish** claim that ours is a living language and in good health.

**Kiwiness** 'The state or condition of being a stereotypical New Zealander'

1985 *Rip It Up* (Auckland) Nov. 28 Apart from the indefinable '**kiwiness**' of it all, I would have to say the difference lies in the strength of the songs. ...[省略]

**Kiwi-ism**. Also **kiwism**. **a.** 'A distinctive item of NZ speech or language, a New Zealandism.'

<sup>53</sup> Cf. *NZOD* s.v. **Kiwidom**: '*n.* New Zealanders collectively, esp. viewed as embodying a distinctive culture and mindset.' DNZE にはない民族呼称としての用法に言及している。

<sup>54</sup> *NZOD* には見出し語の記載がない。

1944 FULLARTON *Troop Target* 29 'Which way did you come?' 'Through Larissa, eh?' The final 'eh'? spoken on a rising intonation, is a meaningless Kiwi-ism common to many North Islanders. 1971 ARMFELT *Catching Up* 56 The Kiwisms were slightly accentuated, betraying that they had been popped in for the Englishman's education. 1989 *Listener* 7 Jan. 13 And it's anybody's guess what Japanese tourists make of such Kiwisms as 'She' apples' 'put the nips in'. 1989 *Dominion Sunday Times* (Wellington) 16 Apr. 24 [Heading] Kiwi-isms without the metaphor 1991 *Contact* (Wellington) 24 Oct. 2 J G Wilson has collected some more examples of Kiwi-isms. A loaf of 'brad', The 'Labbanon', the Social Welfare 'bannufut' and the New Zealand-invented 'jatboat'.

**b.** The state or condition of being a (stereotypical) New Zealander.

1984 *New Zealand Times* 38 Oct. 12 Sargeson's views on insularity, true Kiwi-ism, Puritanism, and the craft of writing are to found in each of the 30 pieces here.

**kiwiland** New Zealand. Cf. MAORILAND 3.<sup>55</sup>

1947 DAVIN *For Rest of Our Lives* 396 I'll be going back to good old Kiwiland when the ship pulls out. 1964 DAVIS *Watersiders* 47 This is Kiwiland, see. And we have gentleman's agreement here.

**Kiwi-country** a jocular name for New Zealand as the native haunt of New Zealanders.

1963 CASEY *As Short a Spring* 22 A fellow that's come all the way from Pommie-land to have a quick look at Kiwi-Country..at least ought to have an overcoat to put on himself.

Kiwi-ism (初出1944) を除いて大多数の派生語が1970年代から1980年代

<sup>55</sup> Cf. *NZOD* s.v. **kiwiland**: '*NZ & Aust. colloq.* New Zealander'

半ばに広く流布し始めた結論づけることができる。その理由については影響を及ぼしたであろう言語外の要素を、当時の社会情勢から探してみたい。

まず注目すべきは、Kiwiが原義であるNZ固有種の鳥(19世紀前半)から、換喩的に発展していく点である。19世紀末にはすでに国家の表象(emblem)として(語義3)用いられ、あるいはペンネームや匿名としての使用(語義6)が始まる。20世紀に入ると、商品名(語義5)や(複数形で)団体名(語義4)、さらに、第一次世界大戦を背景として兵士(語義7)、1980年代にはNZ英語そのものへと、さらに多様な意味用法を獲得していく<sup>56</sup>。Kiwiは一方でさらに名詞化(Kiwan)され、他方で動詞化(kiwiify)され、転じてさらに名詞化(kiwification)されていく。またKiwidom, Kiwihood, Kiwiness, Kiwi-ismなども加わり、その派生的拡張が、非常にポピュラーなかたちですばやくネットワーク化され、NZアイデンティティへの意識覚醒、文化背景の自己認知、NZ化と深くかかわっていることを示している。それは上述したように、New Zealandから派生した形容詞、動詞、動詞派生名詞の発生パターンと軌を一にしていることから推察できよう。NZとKiwiは一旦それを核とする国民イメージを作り上げた瞬間に、そこから新たな表現が放射状に増幅する形で派生され、ネットワーク化され、既成の国家イメージ、国民性のステレオタイプを強化するという役割を果たすように思われる。

流行語としてのkiwiの兆しは1980年代初頭'Kiwi'の名を冠した一般読者向けの辞書を装った通俗本のタイトル(Leland Jr.: *A Personal Kiwi-Yankee Dictionary*, 1980)になっていることから推察できる。NZ英語や政治社会

<sup>56</sup> 'When information first began to filter through to Europe about a very strange bird found in New Zealand, people developed an odd concept of what it looked like because early drawings were made by looking at the dried skins that had been sent back. And attempts to transliterate the Maori name came out as kee-vee or sometimes kivi-kivi. It's hard to know why it gained the name kiwi in Maori. If ever you hear one, or a recording thereof, the cry often doesn't sound anything like kiwi. By 1887 the kiwi was being depicted in a university coat of arms, and by the start of the First World War, with a capital K, the term was widely used to describe New Zealand soldiers. It has grown since to become shorthand for sharemarket dollars, a furry fruit, a boot polish - and New Zealand citizens in general.' (Cryer 2002:118)

文化習慣についてエピソード的に紹介するこの辞書形式の読み物はユーモアまじりの洒落な文体で今日まで親しまれている。その記述(s.v. **Chinese goose-berries**)にこうある: '...since the NZ merchants changed the name in order to facilitate sales to the United States during the days when the U.S. didn't officially recognize Red China's existence.' 改名の理由は定かではないが結果として生じた命名は事実である。OrsmanのONZD(s.v. **Chinese gooseberry**)の用例によれば、Kiwifruitの原種でChinese gooseberryと呼ばれていた中国原産のものを1920年代に輸入したことがきっかけで1940年代には一般化したと推察される。その名がkiwifruitと変わるのには1970年代(ONZD s.v. **kiwifruit**による初出1973年)である<sup>57</sup>。Kiwi(比喩用法sense 12)が果物名として出現するのは1972,73年(引用の辞典はカナダと米国)で、他称(国外からの呼び名)である。同時期に国内ではkiwifruitと自称していた。Orsmanはその命名法の由来について全く言及していないが、kiwifruitが語源的にkiwiの用法の転移したもののひとつであることは疑えないだろう。ただ、その転移が固有鳥とフルーツの視覚的類似による直接的連想によるものか、すでに確立しているNZの国民性の象徴を媒介として間接的に関係づけられたものかは明白ではない。Keith Jacka Holyoake(1904-83; 首相在職60-72, 総督在職77-80)は'Call me Kiwi'と聴衆に呼びかけたことで知られる政治家である(McGill 2004:127)。「leadership by consent」をモットーとし(Sinclair 2000:304)、ANZUS同盟国ゆえのベトナム派兵に消極的であった彼に与えられたあだ名も、Smith(2005:180)によれば、頭韻句'Kiwi Keith'であった。その政治選択の正当性はその後の歴史が示す通りであり、Kiwiはその後政治面以外のマクロな状況とも相俟ってNZの積極的表象となっ

<sup>57</sup> Orsman DNZE(1997:416 s.v. **kiwifruit**): '1973 NZ Patent Office Jnl No.1129 6 Sept. Pacific Kiwi fruit B102913 [filed] 15 January 1973..canned kiwi fruit (Chinese gooseberries). Auckland Export Limited.' なお初期に並行して存在した **kiwi berry** (1966, 1974の用例)はDNZEでは'an obsolete trade-name for KIWIFRUIT'とされる。OEDには次の例がある: '1968 NZ.NEWS 23 OCT.2/4 New Zealand exports of chinese gooseberries will enter the United States - where they are called 'giant Kiwi-berries' - almost duty-free from next season.' (s.v. **kiwi** 5)

ていくようすが窺える。

Kiwispeak は *Kiwi* と *-speak* [複合語形成語尾] の結合形として、NZE を表す多様な選択肢の最新用語として出現したようすが見て取れる。ニュージーランド (英語) という概念はすでに Zealand 系、New Zealand 系、Godzone 系、New Zild 系、Enzed 系、Aotearoa 系などの先行語形によって表されていたのだが、*Kiwi* 系は、より簡潔で口語的な装い (短縮形) が好まれるようになった傾向の顕著な表れであると推測される。現在に至るまでもっとも生産的な語彙ではないかと思われる。McGill (2004:8) が 'kiwi' という表現をあえて自虐的ユーモアを込めて用い "Kiwi slang defines us as Kiwis, warts and all." と述べるのは象徴的である。

#### 9. エスノニム・ネットワーク: 全体像の考察

エスノニムの出現年代と意味の展開を図式化してみると、社会の変動とエスノニムの出現、消長との関わりが見えてくる。仔細に検証すれば、言語と政治・社会史の関連が直接的で顕著であるものと一見そうでない現象のあることがわかる。三つの名称 (国家/社会、民族/社会集団、民族言語/文化/精神) は基本的に時間軸に沿って、その概念の順 (国家名称 > 民族名称 > 民族言語名称) に出現し、ある時点からは互いに共鳴し競い合うように類似の現れ方をしている。それらを要約すれば、エスノニムにかかわる命名の歴史は、自己の帰属する地平 (トポス) を見出しつつ、吾 (エゴ) とは誰かの追究を経て、自己を支え規定する言語/文化/精神 (エートス) の模索へと到る一連の自己探求と発見の物語の記録になっている。各名称ごとに特徴を簡略化して述べれば、以下のようになる。

##### <国家/社会名称>

- (1) 入植当初の散発的な移住の時代には個別地域ごとの colony や settlement という一般名称が使われ、全体を包括する名称として、タスマンに由来する New Zealand が存在した。政治体制の変容とともに大文字 Colony (of N.Z) や the Dominion (of N.Z) も現れるようになる。そ

れは今日では歴史的用法として残っている。

- (2) New Zealand が馴染み、土着化していく過程で、変種として、派生語が、より口語的、俗語的なニックネームとして 20 世紀に入って生まれ、一般化していく。それらは Enzed, New Zild, Kiwi などである。
- (3) マオリ語に由来する起源的に最も古い Aotearoa が 1980 年代まで一般的でなかったのは、少数民族としての先住民に優越するパケハの多数派支配の価値観のゆえである。少数ではあるが、マオリ以外にパケハの良心的な同調者に使われてきている。
- (4) God's own country はエスノニムとは異質の慣用句で、19 世紀末に生れ、ある政治家の発言から広まることになった。二つの省略縮約形 (God's own, Godzone) を生んで、さらに親しまれ長く用いられてきた。
- (5) その他に NZ の二大 emblem である fern と kiwi を含む the land of ferns, Kiwiland が WWI から WWII の間の時期に出現する。
- (6) また南北二島に関して、それぞれ down South, up north という慣用句が早く (19 世紀) から副詞として用いられており、その転用で特に down south は名詞に転じた地域的名称として down under とともにその後 (20 世紀) に登場する。周縁的名称として地域間差異を焦点化した North Island, South Island, the South, Mainland も登場した。前二者は 18 世紀だが、後二者は比較的新しく 20 世紀に出現する。

##### <民族/社会集団名称>

- (1) 基本的に New Zealander がもっとも古く 18 世紀に現れ、1810 年代には settler, European, pakeha (Maori 語の呼び名) が、1830 年代には colonist が、1850 年代には English が並行して存在した。
- (2) その後、New Zealander の俗語的、口語的な短縮縮約語として 20 世紀前半に Enzed, Enzedder, Newzie が登場するが、それらの用法は国家社会名称の発生状況に準じている。
- (3) その他に 20 世紀最初の 20 年に kiwi, Kiwian, Silver Fern, fernleaf が、20 世紀後半に New Zilder, Godzoner, ordinary bloke などが出現する。

前四者は NZ を代表する emblem の隠喩的、換喩的用法であり、同時に WW1 と深く関わっている。

- (4) 周縁の名称として地域間差異を焦点化した North Islander, South Islander, Mainlander が 19 世紀後半に登場した。

<言語/文化/精神名称>

- (1) 上記二つの名称と異なり、認知および命名に辿り着くまでに時間がかかり、最初の名称 New Zealand English, New Zealandese が 1910 年前後にはじめて、まだごちないその姿を現す。
- (2) New Zealand English, New Zealandese に遅れて 1950 年代に New Zealandism が誕生した。その後、1960 年代に口語俗語系列の New Zild, Pakeha が生まれた。Kiwi 系列では 1940 年代に Kiwi-ism が、1990 年代に Kiwispeak が生じた。
- (3) Kiwi (18 世紀) は長い時間のうちに多義性を獲得し、また多数の派生語を産んだ。上述した Kiwi-ism や Kiwispeak を含めて 1980 年以降に生まれた Kiwi-words は多い。
- (4) Kiwi-語幹の造語力は、固有種の飛べない鳥の繁殖力に反比例するかのよう強い。品詞的にも形容詞、動詞、複合名詞(しばしば状態や性質を表す)など、多岐にわたる。その理由は NZ の emblem としての固有鳥からの転義用法が多岐にわたったということのほかに、「語幹 kiwi+接辞」形式の派生語が多数に上っているからである。kiwi 派生語が特に 1980 年代以降に集中している事実は、国際的に独自の外交路線を歩むようになった国家としての威厳、kiwi がその国家の象徴としての kiwi のイメージの定着の状況、それに、kiwi に着想を得て造語された kiwifruit (短縮形 kiwi) の国際的認知と無関係ではないかもしれない。母音で終るマオリ語起源のこの 2 音節語は飛べない鳥のイメージと重ねられ、意味論的にも強いインパクトを与え、音声的にも英語とは異質の、珍しさと親しさという感覚を呼び起こしたと思われる。その同音効果が

timeline 1 <国家/社会>名称 初出年代一覧(網掛は初出までの期間を表す)

	1769	.....	1840	.....	1900	.....	1945	.....
New Zealand	1768	----						
Zealand	1773							
Zealandia					1857			
Aotearoa					1855			
Aotearoa New Zealand								1988
Land of the Long White Cloud							1903	
God's own country							1892	
God's own								1916
Godzone								1964
Enzed								1917
New Zild								1992
Kiwiland (Kiwi-country)								1947 (1963)
the land of ferns								1910
the Island					1816			
these Islands, New Zealand Islands								1847
down under B.1.								1905
down south B.						[1867 adv.]		1905 [‘The South Island’]
up north [adv. ; also used as a nominal]								1869
North Island/Isle					1773			
South Island/Isle					1773			
The South								1937
Mainland	1774						[either of the two main islands of NZ]	1949 [‘the Southland’]
[the Dominion]								1907
[the Colony]								1840
[settlement 1]	1777							[non-Maori local communities before 1840]
[settlement 2]								1839 [non-Maori communities in 1840s & after]
	1769	.....	1840	.....	1900	.....	1945	.....

timeline 2 <民族/社会集団>名称 初出年代一覧

1769 .....	1840.....	1900.....	1945 .....
Pakeha	1817	['a pale skinned non-Polynesian immigrant']	
English 1.b.	1852		
European A.	1817	['a non-Maori white immigrant']	
-----			
[New Zealander 1]	1769	('Maori')	
New Zealander 2	1848	['Pakeha']	
Zealander	1773		
Enzed, Enzedder	1917		
Newzie [NewZilder]	1946	[1966]	
Aotearoaian	1988		
Kiwi 4 ('a team')	1908		
kiwi 7 ('a soldier')	1918	[WW1] 1941 [WW2]	
Kiwi 8 ('a N.Zealander')	1916		
Kiwian	1916		
Silver Fern; Fernleaf	1908; 1916		
Godzoner	1979		
ordinary bloke	1959		
Mainlander	1950		
North Islander	1850		
South Islander	1873		
[settler 1.a.]	1879	['first settler']	
[settler 1.b.(a)]	1814	['missionary settler']	
[settler 1.b.(b)]	1826	['sealer, whaler']	
[settler 1.b.(c)]	1846	['military settler']	
[settler 1b.(d)]	1849	['old settler']	
[colonist]	1834		
1769 .....	1840.....	1900.....	1945 .....

timeline 3 <言語/文化/精神>名称 初出年代一覧

1769 .....	1840.....	1900.....	1945 .....
New Zealand English	1910		
New Zealandism 1	1921	['national spirit']	
New Zealandism 2	1957	['idiom']	
New Zealandese 1	1909	['the Maori lang.']	
New Zealandese 2	1900	['NZEnglish, idiom']	
New Zild	1966		
-----			
Pakeha 4	1969	['Eng. lang. in NZ']	
-----			
Kiwi 3	1898	['an emblem']	
Kiwi 10 ('NZEnglish')	1981		
Kiwi-ism (a) [NZ speech/lang.]	1944		
Kiwi-ism (b) ['state/condition of being NZ']	1984		
Kiwispeak	1990		
Kiwidom	1984		
Kiwihood	1987		
Kiwiiness	1985		
Kiwiana	1989		
1769 .....	1840.....	1900.....	1945 .....

kiwi-系列の派生語産出を後押しすることになったかもしれない。

### 10. おわりに

1840年という年はワイタング条約の締結により、大英帝国が公式にNZを統治するという歴史が始まった年である。それから160年を超える歴史の中、Orsmanの歴史原理に基づく辞書が完成したのが1997年であった。遡って関連する世界の歴史を緋けば、興味ある指摘ができよう。それは米国と英国にお

けるできごとである。米国においてウェブスターの辞書が完成した 1828 年は、独立戦争を勝利して名実共に独立したアメリカが誕生 (1776 年) して半世紀してからであり、1621 年ピルグリムファーザーズがプリマスロックに足を踏み入れた年から数えておよそ二世紀の隔てがある。一方、アメリカを宗主国として支配し戦いに敗れた英国でジョンソンの辞書が完成したのがアメリカ独立戦争の 20 年ほど前の 1755 年で、その年はエリザベス一世治世下で英国がスペインのアルマダ (無敵艦隊) を破った 1587 年からおよそ 170 年隔たっている。

辞書の編纂事業を nationalism の発露の穏やかな一形態と見なせば、その営為に随伴する nationalism の覚醒と成長におよそ一世紀半から二世紀前後の期間を要したことになる。それが偶然の一致であったかどうかの正確な判定は後世の歴史家の判断に俟つことになろうが、おそらく人間の歴史の流れに区切りを付け、ある種の評価を下すのに適切な時間の経過であるように思われる。三つの時空軸の異なる歴史の中で、辞書の編纂という知的活動がそれぞれの歴史のできごととふれて開花したことは偶然の所産ではないであろう。

NZ においては、2015 年が Anzac Day100 周年、2040 年はワイタング条約 200 周年に当る。2015 年を前にして national identity を模索するさらなる旅は続くであろう。それは従来のを踏襲し、強化することにつながるのかどうか興味はつきない。また 2040 年に向けて多文化共生社会の実現と過去二世紀の抗争過程で生じた多数派パケハの少数派マオリに対する一方的支配体制と条約遵守違反に対する異議申し立ては続き、歴史観の相克は潜伏し、和解も徐々にしかすすんでいない状況をどう打開するのか。わだかまりを残したまま多民族国家の理想へと進むことは容易ではない。そのような歴史の負の遺産を清算する過程で national identity の修正を迫られることになるであろう<sup>58</sup>。

<sup>58</sup> Smith (2005:226) は rupture という表現で NZ の現状を次のように指摘する：'Expanding citizenship composed the second part of the greatest rupture in NZ history since colonisation, the NZ wars, and World War I. Rupture in the very meaning of New Zealandness obliged people to adapt to new ideas about who belonged. The country reshaped its political institutions to reflect that its people and culture had grown more diverse and connected to the world, and to accommodate the concept of biculturalism.'

<REFERENCES>

- Algeo, John (ed.) (2001) *English in North America*. The Cambridge History of the English Language, Vol.VI. Cambridge University Press.
- Bailey, Richard W. (1990) "English at its twilight" in Ricks & Michaels (1990), pp.83-94.
- Bailey, Richard W. (1991) *Images of English: A Cultural History of the Language*. The University of Michigan. [Cambridge University Press1992]
- Bain, Caroline (coordinating author) (2006) *New Zealand*. London: Lonely Planet.
- Barnard, Roger & Ted Glynn (eds.) (2003) *Bilingual Children's Language and Literary Development*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Bauer, Laurie (1994) 'English in New Zealand', in Burchfield (1994), pp.382-429.
- Bauer, Laurie (2000) 'The dialectal origins of New Zealand English' in Bell & Kuiper (eds.) (2000), pp.39-52.
- Baugh, Albert C. & Thomas Cable (1978) *A History of the English Language*. 3rd ed. London: Routledge & Kegan Paul.
- Belich, James(2006) 'History [of NZ]', in Bain(2006), pp.31-39.
- Bell, Allan and Janet Holmes (eds.) (1990) *New Zealand ways of speaking English*. Philadelphia: Multilingual Matters.
- Bell, Allan & Koenraad Kuiper (eds) (2000) *New Zealand English*, Victoria University Press.
- Bell, Allan & Koenraad Kuiper (2000) 'New Zealand and New Zealand English' in Bell & Kuiper (eds.) (2000), pp.11-22.
- Bell, Allan, Ray Harlow & Donna Starks (eds.)(2005) *Languages of New Zealand*. Wellington: Victoria University Press.
- Bell, Leonard (2006) 'Auckland's centerpiece: unsettled identities, unstable monuments' In Coombes (2006), pp.100-120.
- Brown, Russell (2006) 'The Culture' in Bain (2006), pp.40-53.
- Bullokar, William (1580;1586) *Booke at Large, Bref Grammar and Pamphlet for Grammar*. In Otsuka (1971), pp.5-164. Tokyo: Nan' Un-do.
- Burchfield, Robert (ed.) (1994) *English in Britain and Overseas. The Cambridge History of the English Language. Vol.V*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cameron, Deborah (1990) 'Demythologizing sociolinguistics: why language does not reflect society' in Joseph & Taylor (1990),pp.79-93.
- Colley, Linda (1992) *Britons, Forging the Nation 1707-1837*. New Haven/London: Yale University Press.
- Coombes, Annie E.(ed.) (2006) *Rethinking settler colonialism, history and memory in Australia, Canada, Aotearoa New Zealand and South Africa*. Manchester: Manchester University Press.
- Coulmas, Florian (ed.) (1997) *The Handbook of Sociolinguistics*. Oxford: Blackwell.

- Cryer, Max (2001) *Curious questions: as heard on national radio*. Auckland : Harper Collins.
- Cryer, Max (2002) *Curious kiwi words*. Auckland : Harper Collins.
- Cryer, Max (2003) *More Curious questions: as heard on national radio*. Auckland : Harper Collins.
- Dench, Alison (2005) *Essential Dates - A Timeline of New Zealand History*. Auckland: Random House, NZ.
- Denoon, Donald, Philippa Mein-Smith with Marivic Wyndham (2000) *A History of Australia, New Zealand and the Pacific*. Malden/Oxford: Blackwell Publishing.
- Deveson, Tony (1998) "A Bibliography of Writing on New Zealand English", updated 6 March 1998 (University of Canterbury). Orig. in *New Zealand English Newsletter* 2:17-25
- Deveson, Tony (2000) 'Handling New Zealand English lexis' in Bell & Kuiper (eds.) (2000), pp.23-39.
- Deveson, Tony (2004) *The New Zealand Pocket Oxford Dictionary*. 2nd ed. Oxford: Oxford University Press. [abbr. NZPOD]
- Deveson, Tony (1998/2006) *The New Zealand Oxford Paperback Dictionary*. Oxford: Oxford University Press. [abbr. NZOPD]
- Deveson, Tony & Graeme Kennedy (2005) *The New Zealand Oxford Dictionary*. Oxford: Oxford University Press. [abbr. NZOD]
- Edwards, John (1985) *Language, Society and Identity*. Oxford: Basil Blackwell.
- Gordon, Elizabeth et al. (2004) *New Zealand English, Its Origins and Evolution*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gordon, Elizabeth & Tony Deveson (1985) *New Zealand English, An Introduction to New Zealand Speech and Usage*. Auckland: Heineman.
- Green, Jonathan(ed.) (1998) *Cassell's Dictionary of Slang*. London: Cassell.
- Greenbaum, Sydney (eds.) *Comparing English Worldwide. Oxford - The International Corpus of English*. Oxford: Clarendon Press, 1996.
- Holmes, Janet (1996) "The New Zealand Spoken Component of ICE: Some Methodological Challenges" in Greenbaum (1996), pp.163-181.
- Hundt, Marianne (1998) *New Zealand English grammar fact or fiction? : a corpus-based study in morphosyntactic variation*. (Varieties of English around the world) Amsterdam/Philadelphia: J. Benjamins.
- Johnson, Samuel (1755) *A Dictionary of the English Language*. [Reprinted from the first edition(1755), with a preface by Robert. W Burchfield.] London: Times Book, 1979.
- Joseph, John E. (2004) *Language and Identity - National, Ethnic, Religious*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Joseph, John E. and Talbot J. Taylor (eds.) (1990) *Ideologies of language*. London: Routledge.
- King, Michael (2003) *The Penguin History of New Zealand*. Harmondsworth: Penguin Books.
- Kuya, Takao (久屋孝夫) (1990) 「エスノスピークの構造と生成---英語の自民族中心主義---」, 天野政千代他編『ことばと文学と文化と』 pp.403-414. 東京: 英潮社新社.
- Kuya, Takao (1991) "Prejudiced Discourse : Use/Abuse of 'Jew' in *the Merchant of Venice*" in *Language and Style in English Literature*, edited by Michio Kawai. pp.522-41. Eihosha.
- Kuya, Takao (1993) "A Historical Survey of *un-English* & its Socio-Political Context : a case of "nation"-centrism" in *Aspects of Modern English*. pp.77-96. Tokyo: Eihosha.
- Lamb, Jonathan (2001) *Preserving the Self in the South Pacific 1680-1840*. Chicago: University of Chicago Press.
- Leland Jr, Louis S. (1980/1990) *A Personal Kiwi-Yankee Dictionary*. (orig. ed. 1980; 2nd ed. 1990) Dunedin: McIndoe Publishers.
- Le Page, R.B. (1997) 'The Evolution of a Sociolinguistic Theory of Language' in Coulmas (1997), pp.16-32.
- Lie, James H., Tim McCreanor, Tracy McIntosh & Teresia Teaiwa (2005) *New Zealand Identities: Departures and Destinations*. Wellington: Victoria University Press.
- McArthur, Tom (1992) *The Oxford Companion to the English language*. Oxford: Oxford University.
- McArthur, Tom (1998) *The English languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McArthur, Tom (2002) *The Oxford guide to world English*. Oxford: Oxford University Press.
- McGill, David (2003) *The Reed book of New Zealand slang*. Auckland: Reed.
- McGill, David (2004) *The Reed book of New Zealand quotations*. Auckland: Reed.
- Mencken, H.L. (1919) *The American Language*. New York: Alfred A. Knopf.
- Morris, Edward E. (1898) *A Dictionary of Austral English*. [1st ed. reprinted, with a new foreword by H.L. Rogers 1972]. Sydney: Sydney University Press.
- Murray, James et al.(eds.) (1997) *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford: Oxford University Press. [abbr. OED]
- Newmeyer, J. Frederick (1986) *The Politics of Linguistics*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Orsman, Harold W. (1997) *The Dictionary of New Zealand English: A Dictionary of New Zealandisms on Historical Principles*. Auckland: Oxford University Press. [abbr. DNZE]
- Otsuka, Takanobu (1971) *A Reprint Series of Books Relating to the English Language, Volume 1*. Tokyo: Nan' Un-do.

- Partridge, Eric and John W. Clark (1951) *British and American English since 1900 : with contributions on English in Canada, South Africa, Australia New Zealand and India* (Twentieth century histories). London : Andrew Dakers.
- Partridge, Eric (1937/1984) *A Dictionary of Slang & Unconventional English*. 8th ed. revised by Paul Beale. London: Routledge & Kegan Paul. [abbr. *DSUE*]
- Peddie, Roger (2003) 'Languages in New Zealand: Population, Politics and Policy.' In Barnard & Glynn (2003) pp.8-35.
- Ransom, W.S. (ed.) (1988) *The Australian National Dictionary: A Dictionary of Australianisms on Historical Principles*. Oxford: Oxford University Press.
- Reddick, Allen Hilliard (1996) *The making of Johnson's dictionary, 1746-1773*. Rev. ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ricks, Christopher and Leonard Michaels. (eds.) (1990) *The State of the Language*. London: Faber & Faber.
- Robinson, Roger & Nelson Wattie(1998) *The Oxford Companion to New Zealand Literature*. Oxford: Oxford University Press.
- Samuels, M.L. (1972) *Linguistic Evolution with special reference to English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sawada, Yoshinari et al. (沢田敬也, 武田修一, 坂本都子, 佐和田敬司編) (2001) 『新オーストラリア・ニュージーランド英語中辞典』横浜: オセアニア出版社.
- Sinclair, Keith (1959/2000) *A History of New Zealand*, revised edition. [Additional material by Raewyn Dalziel 2000] (orig.ed.1959) Harmondsworth: Penguin Books.
- Sinclair, Keith (1986) *New Zealand's search for national identity*. Allen & Unwin in association with the Port Nicholson Press, Wellington, N.Z.
- Smith, Anthony D. (1991) *National Identity*. Harmondsworth: Penguin Books.
- Smith, Olivia (1984) *The Politics of Language 1791-1819*. Oxford: Clarendon Press.
- Smith, Philipa Mein (2005): *A Concise History of New Zealand*. Cambridge University Press.
- Tanaka, Katsuhiko (田中克彦) (1981) 『ことばと国家』東京: 岩波書店.
- Turner, George W. (1966/1972) *The English Language in Australia and New Zealand*. London: Longmans.
- Wall, Arnold (1951) "New Zealand English" in Partridge & Clark (1951), pp.89-95.
- Webster, Noah (1828) *An American Dictionary of the English Language*. [Reprinted 1976, Tokyo : Kodansha]
- Wells, Peter & Stephanie Johnson (creative directors) (2005) *Auckland Writers & Readers Festival 05*. (brochure) Festival Office. Auckland.
- Wilkes, G.A.(1996) *A Dictionary of Australian Colloquialisms*. Oxford University Press.
- Williams, Raymond (1976) *Keywords*, Fontana Communications Series, London, Collins, 1976. [New edition, Oxford University Press, 1984.]

[Abstract]

The Making of English in New Zealand  
& Formation of Self-consciousness about National Identity  
with Special Reference to Ethnonymic Discourse

Takao KUYA

This paper discusses the relationship between the formation of New Zealand English and consciousness of national identity in the making of New Zealand as a nation/state with special reference to ethnonymic discourse in New Zealand. In particular I will examine what is meant by the appearance, or rise and fall, of ethnonyms in a broader context including both intra-linguistic and extra-linguistic factors.

This context can be best defined by ethnonymic discourse. In the ethnonymic discourse I will examine three types of ethnonyms that are deeply committed with nation image, or national identity, that is, i) the names of the nation states/societies/communities, ii) the names of ethnic groups and iii) the names of languages/cultures/'ethos' or 'Psyche' that have their appearance in the history of what they call *New Zealand* since the dawn of its history. Instances of ethnonymic discourse are mainly drawn from Orman's *The Dictionary of New Zealand English: A Dictionary of New Zealandisms on Historical principles* published in 1997. It offers as linguistic data massive historical documents that have been written and spoken in the past centuries since Captain Cook first landed this island *Aotearoa New Zealand*.

Overall sociolinguistic survey shows the following conclusions. The three different naming types have grown hand in hand, having a mutual influence on one another, from the beginning of N.Z. history. It seems evident that the three name categories make an intertwining bundle, or linguistic network, of ethnonyms. Some ethnonyms clearly show a very close correlation with historical events, such as voyages of Tasman and Cook (e.g. *New Zealand*), Seddon's famous speech (*God's own country, Godzone*), two World Wars (*Enzed(der)*, *kiwi*, *fernleaf*), and changes in NZ's political status as a nation (*Colony to Dominion*), while some seem to show only an indirect relation with history. To the latter belong ethnonyms like *kiwi*-related coinages, such as *kiwi-ism*, *kiwispeak*, *kiwidom*, *kiwiness*, *kiwihood*, *kiwifly*, *kiwification*. What is specifically significant is that majority of the *kiwi*-based epithets that have appeared recently are most proliferating and creative. Increasing international trade can be inferred as one of the causes of this popularity in the 1980s. An independent study will be needed on the problems concerning national identities such as formation of NZ as a multicultural nation, reconciliation between

the minority Maori and the majority Pakeha.

It is hard to estimate precisely how effectively and deeply the ethnonymic network can operate on people as a medium which might imprint ideas of national identity on their mind and mould them into distinctive characters fit in the supposed nation image to be developed and maintained. However, from a historico-sociolinguistic viewpoint, it should be natural that this sort of networking cause in people's mind gradual, but constant and steady transformation of concepts of national identity and nationalism.